

# 上池遺跡第3次発掘調査報告書

2010年

神戸市教育委員会

# 上池遺跡第3次発掘調査報告書

2010年

神戸市教育委員会



線刻土器片(実測図番号175)

## 序

明石川は神戸市の西部旧明石郡のほぼ中央を流下し、明石市街地の西部で明石海峡に注ぐ大河川です。流域は神戸市内有数の遺跡密集地帯で、特に下流域は大部分で埋蔵文化財の存在が確認されています。

今回報告します上池遺跡は、この明石川下流域の伊川との合流点に位置し、伊川を隔てて明石市と接し、近世明石城城の北側に位置する遺跡です。近年住宅建設や道路改良工事に伴う調査で平安時代の建物跡の発見や土器・瓦・陶器類が多量に出土することで注目されてきた遺跡です。

今回の調査では、限定された調査区のなかで奈良時代から平安時代前期の建物が集中して発見され、出土遺物の内容などから、地方官衙であった可能性もできました。今後周辺の調査の進展が必要ですが、上池遺跡が、古代の明石郡において重要な位置を占めていたことをうかがわせる遺跡として重要だと考えられます。

今回の発掘調査成果の概要である本書が、地域の歴史・文化を理解する資料として、また文化財保護へのご理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、現地での発掘調査実施および報告書作成作業にあたり終始快くご協力いただきました福祉法人光朔会、地元上池自治会をはじめ関係諸機関ならびに関係各位にたいしまして厚く御礼申し上げます。

平成22年12月28日  
神戸市教育委員会

## 例　言

- 本書は神戸市西区玉津町上池字五鬼田315-6、315-7、315-10において実施した老人福祉施設建設に伴う発掘調査の報告書である。
- 現地における調査は平成21年8月5日から平成21年11月4日の期間で実施し、遺物整理作業は平成21年度、平成22年度の2ヵ年わたって埋蔵文化財センターにおいて実施した。
- 現地調査および遺物整理作業は、神戸市文化財保護審議会の指導を得て、下記の調査組織によって実施した。

### 調査組織表

平成21年度(発掘調査)・平成22年度(整理作業)

神戸市文化財保護審議会委員　史跡・考古資料担当

工　業　善通　大阪府立狭山池博物館館長

和　田　晴吾　立命館大学文学部教授

### 教育委員会事務局

教育長　橋口　秀志

社会教育部長　大寺　直秀

教育委員会参考　柏木　一孝

(文化財課長事務取扱)

社会教育部主幹　渡辺　伸行

(埋蔵文化財センター所長事務取扱)

埋蔵文化財指導係長　丸山　潔

埋蔵文化財調査係長　千種　浩

文化財課主査　丹治　康明

文化財課主査　安田　滋

文化財課主査　斎木　巖

事務担当学芸員　中谷　正(平成21年度)　佐伯　二郎(平成22年度)

調査担当学芸員　西岡　巧次　阿部　敬正

保存科学担当学芸員　中村　大介

遺物整理担当学芸員　黒田　恭正　佐伯　二郎(平成21年度)　西岡　誠司(平成22年度)

- 遺物の水洗作業は埋蔵文化財センターで行い、遺物の接合・復元・整理は黒田　恭正指導のもと遺物整理員　納　厚子、芝　恵子、柴田　やすよ、谷口　康子、中野　良栄の各氏が行い、遺物実測・採拓は西岡　巧次・中村　大介の両名が分担しておこなった。

- 報告書に用いた遺構写真は西岡　巧次が撮影し、整理後の遺物写真は西大寺　フォト　杉本　和樹氏が撮影を行った。

- 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の25000分の1地形図「明石」、「前開」、「二見」を、詳細位置図は神戸市発行2500分の1地形図「大津」、「平野」、明石市発行10000分の1地形図「明石市東部」の一部を使用した。

- 基準点測量は株式会社関西エンジニアリングに委託して実施した。これにもとづき本書に用いた方位・座標は、平面直角座標世界測地系で表記し、標高は東京湾中等潮位(T.P)で表記した。

- 本書の執筆は、第Ⅲ章第2節(3)-(A)金属製品・(B)木製品を中村　大介が担当し、その他を西岡　巧次が担当した。編集は西岡　巧次が行った。なお出土遺物および調査に関わる図面・写真は、神戸市埋蔵文化財センターに保管している。

- 発掘調査の実施ならびに本書の刊行に際しては、老人福祉施設建設の事業主である社会福祉法人光朔会に多大なるご協力をいただいた。記して感謝いたします。

# 目 次

## 本文目次

第Ⅰ章 はじめに .....	1
(1) 位置と環境 .....	1
(2) 調査に至る経過 .....	2
第Ⅱ章 遺跡周辺の環境 .....	3
第1節 地理的環境 .....	3
第2節 歴史的環境 .....	3
第3節 既往の調査 .....	6
第Ⅲ章 調査の概要 .....	9
(1) 調査の経過 .....	9
(2) 基本層序 .....	9
第1節 検出遺構 .....	11
(A) 掘立柱建物 .....	11
(B) 河道・溝及び鋤溝状遺構 .....	21
(C) 土坑 .....	22

第2節 出土遺物 .....	23
(1) 土器及び陶器類 .....	23
(A) 掘立柱建物 .....	23
(B) 河道・溝及び鋤溝状遺構 .....	26
(C) 土坑 .....	26
(D) 遺物包含層 .....	29
(E) 製塙土器 .....	33
(2) 瓦類 .....	33
(A) 瓦 .....	33
(3) 金属製品・木製品とその他の遺物 .....	36
(A) 金属製品 .....	36
(B) 木製品 .....	37
(C) その他の遺物 .....	40
第IV章 まとめ .....	41
第1節 上池遺跡における建物群の変遷 .....	41
第2節 上池遺跡をめぐる地形分析 .....	44
第3節 上池遺跡の歴史的意義 .....	46

## 挿図目次

第1図 調査位置図 .....	1
第2図 明石川中下流域の汀線の変遷と調査地 .....	2
第3図 明石川中下流域の古代遺跡 .....	4
第4図 上池遺跡周辺の地形と調査地 .....	7
第5図 調査区西壁上層断面図 .....	9
第6図 調査区設定図 .....	10
第7図 調査区遺構配置図 .....	10
第8図 SB01平面図及び断面図 .....	11
第9図 SB02平面図及び断面図 .....	12
第10図 SB03平面図及び断面図 .....	13
第11図 SB04平面図及び断面図 .....	14
第12図 SB05平面図及び断面図 .....	15
第13図 SB06平面図及び断面図 .....	16
第14図 SB07平面図及び断面図 .....	17
第15図 SB08平面図及び断面図 .....	18
第16図 SB09平面図及び断面図 .....	19
第17図 SB10平面図及び断面図 .....	19
第18図 SB11平面図及び断面図 .....	20
第19図 SB12平面図及び断面図 .....	21
第20図 SX01平面図及び立面図 .....	23

第21図 掘立柱建物出土土器実測図 .....	25
第22図 河道・溝出土土器実測図 .....	27
第23図 SX01出土土器実測図 .....	28
第24図 遺物包含層出土土器実測図(1)茶褐色粘性砂質土 .....	29
第25図 遺物包含層出土土器実測図(2)下層包含層 .....	31
第26図 遺物包含層出土土器実測図(3)上層包含層 .....	32
第27図 製塙土器実測図 .....	33
第28図 遺構内出土瓦拓影・実測図 .....	34
第29図 遺物包含層内出土瓦拓影・実測図 .....	35
第30図 金属製品実測図 .....	36
第31図 柱材実測図 .....	37
第32図 神戸市出土コウヤマキ材の使用形態 .....	38
第33図 その他の遺物実測図 .....	40
第34図 上池遺跡における建物群の変遷 .....	42
第35図 上池遺跡周辺の地形と主要遺跡 .....	45
第36図 上池遺跡第1次調査出土瓦拓影・実測図 .....	47

## 表目次

第1表 上池遺跡周辺の古代遺跡一覧 ..... 5 第2表 木材物性表 ..... 39

## 写真目次

写真1 木材組織顕微鏡写真 ..... 38

## 図版目次

### 図版 1

1. 上池遺跡周辺航空写真(南から)  
昭和57年撮影
2. 調査区東部全景(北から)

### 図版 2

1. 調査区東部全景(南から)
2. 調査区西部全景(南から)

### 図版 3

1. 掘立柱建物SB01(西から)
2. 掘立柱建物SB02(北から)

### 図版 4

1. 掘立柱建物SB03(西から)
2. 掘立柱建物SB04(北から)

### 図版 5

1. 掘立柱建物SB05(北から)
2. 掘立柱建物SB06(北から)

### 図版 6

1. 掘立柱建物SB07(南から)
2. 掘立柱建物SB08(南から)

### 図版 7

1. 掘立柱建物SB09(東から)
2. 掘立柱建物SB10(南から)

### 図版 8

1. 掘立柱建物SB11(西から)
2. 掘立柱建物SB12(東から)

### 図版 9

1. 掘立柱建物SB04柱材検出状況(西から)
2. 不明土坑SX01(北西から)

### 図版10

出土遺物 土器(1)

### 図版11

出土遺物 土器(2)

### 図版12

出土遺物 瓦・その他

### 図版13

出土遺物 木材・金属製品

## 第Ⅰ章 はじめに

### (1) 位置と環境

上池遺跡が所在する神戸市西区玉津町は神戸市の西部、木見峠を源とする明石川の神戸市側下流域を中心とする地域である。この明石川流域を中心とする古代明石郡には5乃至6の郷が置かれて〔池辺・彌1966〕、現在の玉津町は明石川の下流域にあたる明石郷に含まれていたと考えられる。〔吉田東吾1970〕この明石郷の地域には、郡名を冠する郷として明石郡衙、明石駅家が所在するとされ、玉津町吉田の吉田南遺跡〔吉田南調査団1976〕を郡衙もしくは駅家に、明石市の太寺遺跡〔黒田義隆1985〕が駅家や郡の寺であろうと考えられてきた。また中世玉津地域の東部は「玉造保」〔兵庫県1987〕として明石川の支流龜谷川流域に荘園經營がおこなわれた地域でもある。

このように神戸市西区玉津町では、昭和22年の神戸市との合併以来、区画整理事業や地域北部でのニュータウンの建設が進捗をみる中、これらに伴う下水処理場の建設で吉田南遺跡が発見されたのを端緒にして、交通網の整備や住宅開発・圃場整備事業によって弥生時代から中世の遺跡が開発の波にあらわれるよう集中して発見されてきた。その結果玉津町地域は、古代・中世明石郡の中心地域であり、先に挙げた文献にあらわれる明石郡衙や明石駅家・玉造保などの実態をより具体的な歴史空間として復元できると考えられた。

上池遺跡は神戸市西区玉津町の東南部、明石川左岸に位置し、南西流する伊川が明石川に合流する両河川に挟まれた自然堤防上に占地し、上池集落の北東部にあたる約東西200m、南北300mが埋蔵



第1図 調査地位置図

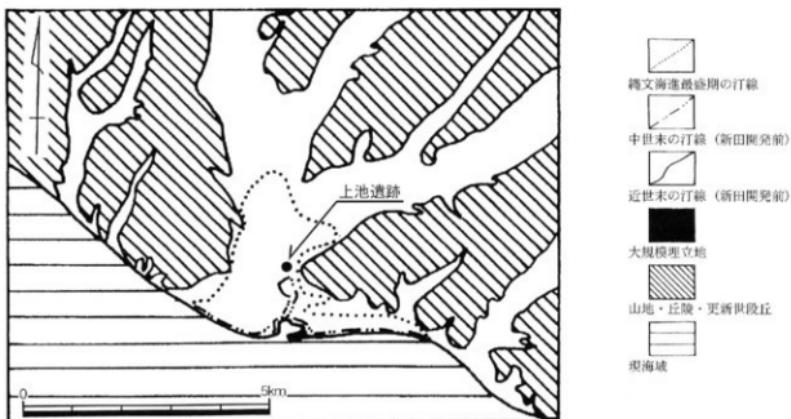
文化財包蔵地推定範囲であり、北側は新方遺跡に接している。上池遺跡のある上池集落は明治期以前には明石郡池野村とされ、江戸時代初期明石城築城とともに城内の「剛の池」周辺にあった集落が移設され、北側にある新方村の分村とされたとされる。(角川地名1988) したがって、現在ある上池集落は近世以後に形成されたと考えられる。

## (2) 調査に至る経過

上池遺跡の調査は、昭和59年から昭和61年にかけて実施された玉津第6小集落地区改良事業に伴う試掘調査が最初である。そのなかで集落の南西部および伊川右岸沿いで実施された試掘調査においては現地表下3.0mで青灰色粘質土もしくは砂礫層が確認され、遺構・遺物は検出されなかった。一方集落の中央東よりで実施した試掘調査では平安時代の遺物包含層が発見され、本格的な発掘調査で掘立柱建物1棟、性格不明土坑1ヶ所を検出し、奈良時代～平安時代の遺物が多量に出土した。(第1次調査)昭和63年には集落の中央を南北に貫く明石・木見線拡幅工事に伴う調査が実施され平安時代の河道もしくは溝が検出されている。(第2次調査)これらの調査の結果、上池遺跡の範囲は試掘調査等の結果から集落の北東部に限定されるにいたった。

平成20年12月、玉津町上池字五鬼田において社会福祉法人光朔会が老人福祉施設オリビア建設計画を企画され、これをうけて同年12月9日試掘調査を実施した結果、現地表下120cmで遺物包含層を確認し、平安時代の須恵器・土師器が多量に出土した。この結果を受けて教育委員会は、発掘調査を含めた保存処置が必要である旨の回答を行い工事原因者である社会福祉法人光朔会と協議を行った。その結果、工事の中で遺跡が影響を被る地中基礎の掘削部分について発掘調査を実施することとなった。

もとより当該地は、第2次調査地の東側に隣接し、第1次調査地の西側街路を隔てて60mに位置し、何らかの平安時代の集落址が検出されると予想できた。



第2図 明石川中下流域の汀線の変遷と調査地

文献〔高橋 学1990〕第2図を転載(一部改変)

## 第Ⅱ章 遺跡周辺の環境

### 第1節 地理的環境

神戸市の西端に位置する明石川流域の地形は、Ⅲ市街地である須磨区以東の地形とは趣をかなり異にしている。六甲山が海にせまる坂の町神戸に対し、海岸から内陸に向かって低地が広く展開する明石川流域では、おのずと立地する遺跡もその条件の下に形成され、遺跡の歴史的性格もその地理的条件の中で育まれたと考えられる。

さて、明石川流域が含まれる播磨灘東岸の地形は、本来水平に堆積していたものが、六甲山の造山・地殻変動のため隆起し、六甲山から西の加古川方向に向かって傾斜面を形成している。この隆起した傾斜面を洗うように海進・海退が繰り返され、さらに伊川、永井谷川、櫛谷川、明石川などの川が浸食し、深い開析谷が形成された。明石川右岸では段丘面の発達が著しく、左岸では深い開析谷によって段丘面を丘陵状にさせ、比較的広い谷平野を形成させることになった。このような地形は約1万年前の最終氷期の終わり頃にはほぼ現在の地勢に近い状況であったと考えられている。（神戸市1988）

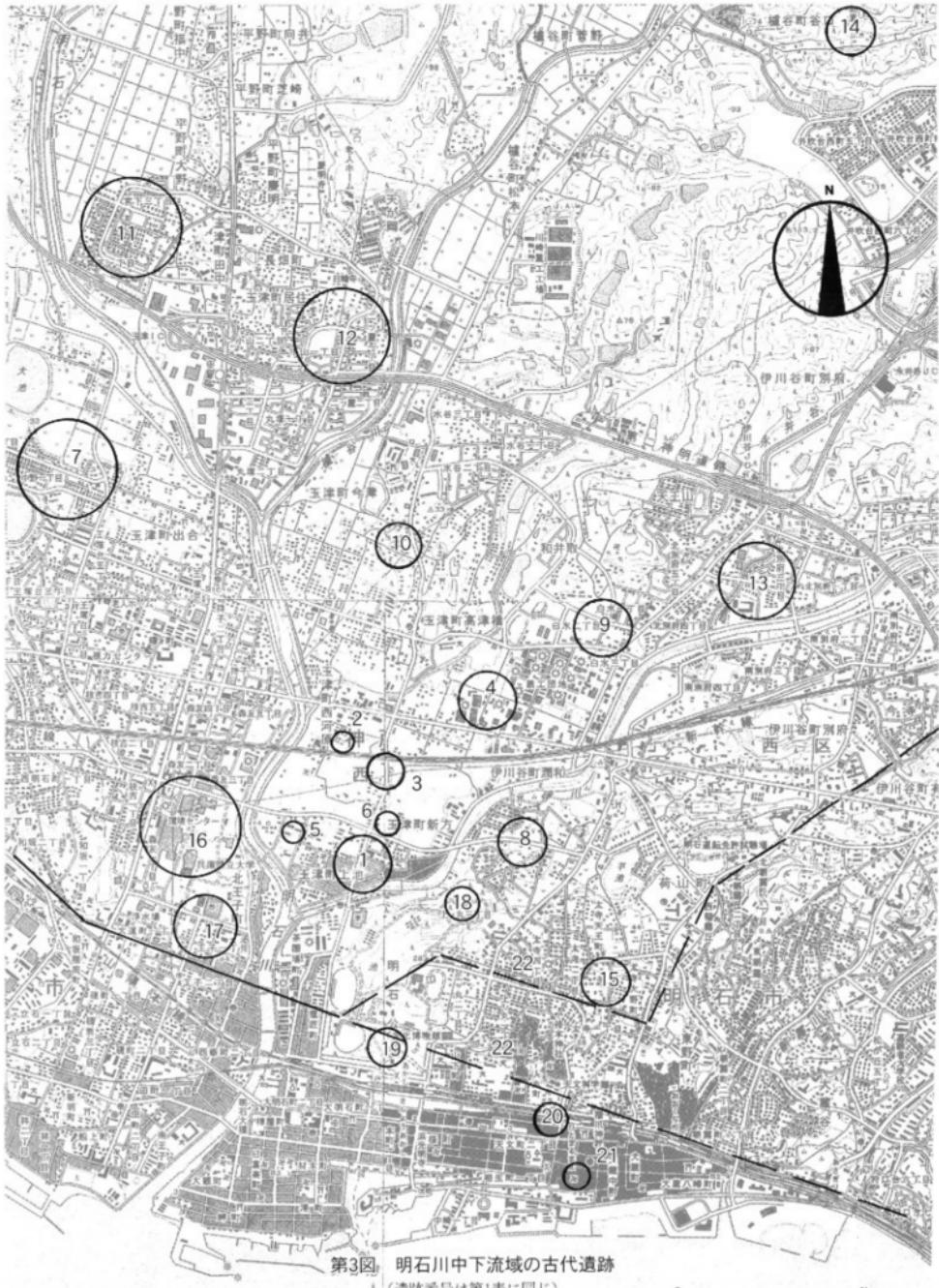
さらに前田保夫氏によれば吉田南遺跡、現在の玉津環境センターの工事で現地表下7mに海成層を確認し、その層中に6400年前のアカホヤ火山灰層を検出している。〔前田保夫1980〕つまり、明石川流域では約6000年前は海面の高さが約6m前後高く、現在の明石川の河口から4.5km近く、山合橋から高津橋の段丘崖下付近まで海域が湾入していたと推定されるのである。所謂繩文海進である。以後除々に地球が寒冷化し、海域も汽水化したと考えられる。所謂弥生小海退を迎えて弥生時代前期の集落を生成する水田化可能な沼沢を各所で生み出すことになる。以後、山合遺跡、新方遺跡、吉川南遺跡、北王子遺跡などの段丘や自然堤防(砂堆)上の弥生時代～奈良時代の集落遺跡形成が認められることなどからみて、明石川中下流域における陸化は拡大したと考えられる。（第2図参照）

明石川下流域における現状から推測される地形形成は、明石川の河川規模から考えられる三角州の発達が通常の河川より少ない状況にある。明石川では、砂堆によって海とは隔てられた潟湖をつくり、それが河川の搬出した土砂によって埋積されるといったプロセスで形成が進む内部充填型三角州であったと考えられている。〔高橋 学1990〕このような地形成因のなかで上池遺跡は伊川と明石川の合流部にあり、河川流量の不均衡の中で明石川側に砂嘴を形成させ、伊川により潟湖様の沼沢地をつくり、その北側砂堆上に遺跡群を形成させていたものと考えられる。

### 第2節 歴史的環境

神戸市西区は旧播磨国明石郡北西部の大半を占めている。この明石郡は「和名抄」によれば6郷に分かれる。すなわち葛江・明石・住吉・邑美・垂水・神戸の各郷である。〔池辺 瀏1963〕葛江郷は明石川右岸海岸部の現在の藤江町付近、邑美郷は明石市魚住町付近、垂水郷は現在の神戸市垂水区ほぼ全域を、住吉郷は異論があるものの現在の西区北部押部谷町、明石郷は明石川中下流域から櫛谷川・伊川流域と明石市東部を含む地域と考えられている。〔吉田東吾1970〕神戸郷は、一部の異本にあるものの詳細は不明であるが、西区北西部神出町に該当するのかといわれる。（註1）

もとより神戸市西区を流下する明石川とその支流である櫛谷川・伊川流域にあたる明石郷と呼ばれた地域には縄文時代から鎌倉時代に至るまで数多くの遺跡が知られている。ここでは上池遺跡と関連のある奈良時代から平安時代に遺構が確認された主要な遺跡を中心に概述して上池遺跡の歴史的性格を位置づける手立てとしたい。



第3図 明石川中下流域の古代遺跡

(遺跡番号は第1表と同じ)

地図番号	遺跡名	遺構・遺物	時期	文献
1	上池遺跡	掘立柱建物・土坑	奈良時代後半～平安時代中期	前田佳久1989
2	新方遺跡	人形・畜串出土	奈良時代	浅岡俊夫1977
3	新方遺跡北方地点	掘立柱建物	奈良時代前期～平安時代前期	浅谷誠吾1996
4	新方遺跡平松地点	掘立柱建物・瓦	平安時代前期～平安時代後期	藤井太郎2003
5	新方遺跡西方地点	耕作痕・溝・掘立柱建物	平安時代	関野 豊1998・東昌代秀1999
6	新方遺跡東方地点	河道	奈良時代	瀧辺伸行1987
7	出合遺跡	掘立柱建物	奈良時代後期	斎木 嶽2010
8	寒風遺跡	掘立柱建物・軒丸瓦出土	平安時代前期～平安時代後期	藤井太郎1998
9	白水遺跡	梵鐘鋸造遺構・掘立柱建物	奈良時代後期～平安時代後期	山本雅和1999
10	高津橋岡遺跡	掘立柱建物	奈良時代前期～奈良時代後期	須藤 宏1996
11	玉津田中遺跡	掘立柱建物・土器	平安時代前期～平安時代後期	口野博史2000
12	二ツ屋遺跡	礎石建物・掘立柱建物	奈良時代～平安時代後期	前田佳久1996
13	北別府遺跡	土器・蔽骨器	平安時代前期	丹治康明1983
14	如意寺	〔記〕に平安時代前蘇西興の伝承	神戸市教委1979	
15	太寺廃寺	掘立柱建物・軒丸・軒平瓦	奈良時代前期～平安時代後期	稻原昭嘉2003
16	吉田南遺跡	掘立柱建物・軒丸・軒平瓦	奈良時代前期～平安時代後期	吉田南嗣調查1976
17	北王子町遺跡	須恵器壺	平安時代中期	稻原昭嘉2002
18	大明石町遺跡第二球場地点	軒丸瓦出土	奈良時代後期～平安時代前期	宮本 博1994
19	大明石町遺跡ヒクラン池地点	土器散布	奈良時代後期	宮本 博1994
20	天文町一丁目遺跡	軒平瓦出土	奈良時代後期	山下俊郎1990
21	大蔵院遺跡	軒平瓦出土	奈良時代後期	宮本 博1994
22	古代山陽道		奈良時代～平安時代後期	吉本昌弘1985・宮本 博1994

第1表 上池遺跡周辺の古代遺跡一覧

まず明石郷のほぼ中央部上池遺跡の北に接して、弥生時代の歴代遺跡として知られる新方遺跡がある。新方遺跡は弥生時代全時期を通じて明石川中流域の中核集落であり続けた遺跡である。(山口英正2003) 新方遺跡の中では、古くには範囲確認調査において畜串・人形などの奈良時代木製品が出土している。(浅岡俊夫1977) また新方遺跡北方地点第3次調査(浅谷誠吾1996)において、奈良時代後期の大型柱掘形を採る掘立柱建物2棟が検出されている。さらに新方遺跡平松地点第3次調査(藤井太郎2003)などでは平安時代前期～中期の掘立柱建物群が検出され、平安時代前期になれば沖積地の自然堤防上に少なからず集落の形成が進んでいたことはあきらかである。

一方、丘陵上や段丘上の遺跡に眼をやれば、方形掘形の大型掘立柱建物が確認された高津橋岡遺跡(須藤 宏1996)、奈良時代の倉庫群が検出された出合遺跡(斎木 嶽2010)、そして古大内式の軒丸瓦とヘラ描き蓮弁の軒丸瓦が出土し、掘立柱建物を検出した寒風遺跡(藤井太郎1998)などが知られる。また、伊川中流域右岸の段丘上に発見された白水遺跡(山本雅和1993)では梵鐘鋸造遺構とともに掘立柱跡物2棟が検出され、奈良時代後期から平安時代後期の軒瓦を含む瓦類や須恵器・土師器が多量に出土した。特に播磨国府系瓦の一つ古大内式の軒丸瓦とヘラ描き蓮弁の軒丸瓦が出土し、当地の地名「延命寺」に関連するものか、同様の瓦が前述の寒風遺跡、明石市の太寺廃寺址(黒田義隆1985)で出土していることから、白水遺跡を明石郡内における梵鐘鋸造や瓦を含めた郡の工房施設にあたる遺跡として捉えることも可能であろう。

平安時代中期以降の遺跡では、礎石建物と共に周溝に囲まれた東西棟の掘立柱建物が見つかった二ツ屋遺跡(前田佳久1997)、また同様な南北棟の長大な掘立柱跡物を検出し、扁字硯の多量出土をみた玉津田中第8次調査がある。(口野博史2000) 特に二ツ屋遺跡は、文献に「玉造保」(兵庫県1987)として残る後期莊園(長講堂領)の実態をとらえる上で重要な位置にある。(註2)

かたや古代明石郷の南部をほぼ東西に貫通すると考えられる古代山陽道沿いの遺跡に目を向けよう。第一に古代山陽道の通過ルートは、明石市における近年の発掘調査によって次第に明らかになりつつある。まず古代山陽道福里地点(稻原昭嘉2003)では、重複する10m幅の道路体と15mの道路体を検出し、出土遺物から八世紀後半に15m幅から10mに縮減されたと推定される。古代山陽道辻ヶ内地点

〔稻原昭嘉2008〕では幅8mの道路体が確認されている。この結果、從来から古代山陽道の通過地とされる北王子町二丁目北側の街路から古代山陽道はなおも西進し、和坂付近にある加古郡条里界からやや北西に方向を変え大同2年から延喜年間に廃されたとされる尼糸駅家推定地長板寺遺跡〔同志社大学1987〕に向かい、直線的に辻ヶ内地点・福里地点につながる。

しかしながら、上池遺跡付近における古代山陽道の通過ルートは、考古学的には明確にされていない。歴史地理学の成果によれば2ルートが想定されている。太寺廃寺址(太寺遺跡)〔稻原昭嘉2003〕の南、県立図書館北側の市道が明石城内をぬい下って、明石市民病院南辺の市道と繋がり、明石川を越えて北王子町に至るルート。〔吉本昌弘1985〕その一方では、北王子町から東に直線的に明石城内の段丘崖をぬって植木神社・月照寺の段丘崖下に至り、そのまま朝霧川東岸まで伸びる直線ルートを考えられている。〔宮本 博1994〕この直線ルート上には、本町式軒平瓦が出土した犬文町一丁目遺跡〔山下俊郎1990〕、大蔵院境内遺跡〔宮本 博1994〕が連なり、この古代山陽道沿いに分布するところの播磨国府系瓦の出土は有力な根拠といえる。

この古代山陽道沿いに展開される遺跡として吉田南遺跡〔吉田南調査團1976〕がある。吉田南遺跡は奈良時代の建物が數十棟検出され明石郡衙として注目される遺跡である。先述した推定古代山陽道の北400mに位置し、官衙風の整然とした掘立柱建物群が検出され、播磨国府系瓦が3種類も出土したことから明石駅家に考える説が出されている。〔今里幾次1978〕しかしながら、調査面積のわりに瓦の出土量が少ないことなどから、駅家ではないとする説があり、〔高橋美久二1990〕建物配置・規模などから郡衙である可能性が高い。また、太寺廃寺〔稻原昭嘉2003〕は創建が奈良時代前期に遡ると考えられ、平安時代中期まで存続したと考えられる寺院址もしくは駅家と考えられている。太寺廃寺からも播磨国府系瓦や白水遺跡で出土したヘラ描き蓮弁の軒丸瓦が出土している。〔黒田義隆1985〕これらから、山陽道北迂回説を探る場合の明石駅家として比定されている〔吉本昌弘1985〕が、駅家としての具体的な構造は未だ検出されていないこと、また白水遺跡出土瓦の出土にみられる地域性の濃い瓦の出土などから地方豪族の寺院である可能性が高い。

### 第3節 既往の調査

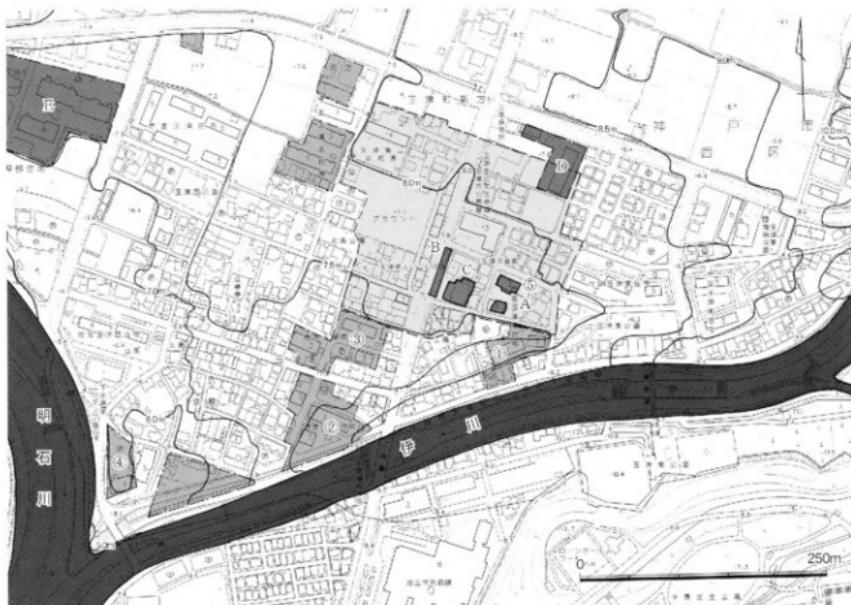
#### (A) 遺跡周辺の埋蔵文化財調査

上池地区における埋蔵文化財調査は、昭和59年度以降平成10年度までに実施された玉津第4・第6小集落住宅改良事業における遺跡確認のため試掘調査を端緒としている。

試掘調査は改良住宅予定地5地点で実施された。①・②地点では砂層および砂礫層が分厚く堆積し遺物・遺構等は検出されなかった。③地点では砂礫層と青灰色粘質土を地表下2mで検出し、陸化した状況は確認できなかった。④地点では2mまで盛土され、北部で陸化した土層を確認できたが、3m弱で青灰色粘質土、その下に灰褐色砂礫となり、遺物・遺構等は検出されなかった。昭和60年に実施した⑤地点の試掘調査において遺物包含層が確認され、第1次調査が実施された。

また一方、上池地区北辺の新方遺跡東方地区第1次・第2次調査においては、およそ現地表から1.2mで弥生時代前期～中期の河道が標高7.5m前後で検出され弥生土器および木製品が多量に出土した。〔渡辺伸行1987〕その間近世の耕作土と弥生時代の遺物包含層の堆積はあるが、河道上面で古墳時代・奈良時代の須恵器がわずかに検出されるにとどまり、上池地区北方のこの地域は、奈良時代以前は低湿地帯であった可能性が高い。

この後、平成7年度に上池地区の北西部で区画整理事業が行われた際に新方遺跡西方地区第1次



第4図 上池遺跡周辺の地形と調査地

上池遺跡の範囲	A. 上池遺跡第1次調査	C. 上池遺跡第3次調査
試掘調査地（遺跡なし）	B. 上池遺跡第2次調査	D. 新方遺跡東方地点
発掘調査地		E. 新方遺跡西方地点

調査、第2次調査として実施された調査で条里に沿う中世の掘立柱建物群が検出され、その下層では条里に沿う平安時代の耕作痕と掘立柱建物が確認されている。〔関野 豊1998・東喜代秀1999〕この耕作痕と掘立柱建物が平安時代前期にまで遡り得るかは不明であるが、遅くとも当地が平安時代後期には陸化し、可耕地もしくは居住地として利用されていたことは明らかである。

以上のような微地形分析と埋蔵文化財調査の状況から現在の上池地区の集落域のうちの北東部が、奈良時代後期から平安時代前期の建物群を主体とする上池遺跡の範囲であると推定されるに至った。

### (B) 第1次調査

第1次調査は前述のとおり昭和61年度玉津第6小集落住宅改良事業に伴う事前調査であり、今回の第3次調査の東50mに位置している。調査では、掘立柱建物1棟、掘立柱建物の柱掘形を切る土坑1基、その下層に溝1条が検出されている。その中で特に土坑(SX02)内からは平安時代前期の須恵器・土師器などの日用雑器とともに軒瓦を含む瓦類や綠釉陶器・灰釉陶器などの当時においては高級品であった陶器類が多量に出土した。また、遺物包含層内から蹄脚硯が出土している。このように調査は限定されたものであったが、瓦類や陶器類が出土し、陶硯をそのうちに含む点は、上池遺跡が一般の奈良時代から平安時代の集落遺跡とは様相を異にした遺跡であり、古代官衙もしくは寺院に関連する遺跡

である可能性が認識されるに至った。(前田佳久1989) なお、掘立柱建物SB01は建物方向を棟方向で北28° 東を探っている。

### (C) 第2次調査

第2次調査は、都市計画道路明石木見線拡幅工事に伴う調査であり、第3次調査地の西側に近接している。調査では、平安時代後期の北東から南西に流れる河道一条を検出し、河道内から平安時代後期の須恵器壺・甕・鉢・小皿・土師器甕・小皿が出土した他、上層部から須恵器壺・鉢・瓦器端など平安時代末葉から鎌倉時代の土器も出土した。さらに下層包含層からは奈良時代後期から平安時代前期の須恵器壺・蓋・壺・転用観・土師器高壺・皿・綠釉陶器、格子叩き目をもつ平瓦・製塙土器などが出土している。(池田 賀他1994)

河道として検出されている溝状の落ち込みは、上がり肩が不分明ながら概ね北28° 東を採り、当地域の条里型地割の方向に合致している。

### 主要遺跡引用文献

- |            |   |
|------------|---|
| 山口英正2003   | 『新方遺跡 野手・西方地区発掘調査報告書』 神戸市教育委員会 2003年                |
| 浅谷誠吾1996   | 『新方遺跡北方地点第3次調査』 平成5年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1996年      |
| 浅岡俊夫1977   | 『新方遺跡発掘調査概要』 神戸市教育委員会 1977                          |
| 藤井太郎2003   | 『新方遺跡平松地点第3次調査』 平成12年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 2003年     |
| 藤井太郎1998   | 『寒風遺跡第1次調査』 平成7年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1998年          |
| 山本雅和1999   | 『白水遺跡 第4次』 神戸市教育委員会 1999年                           |
| 前田佳久1989   | 『上池遺跡』 昭和61年度度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1989年             |
| 関野 勝1998   | 『新方遺跡西方地区第1次・第2次調査』 平成7年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1998年  |
| 東真代秀1999   | 『新方遺跡西方地区第3次』 平成8年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1999年        |
| 渡辺伸行1987   | 『新方遺跡東方地点第1次・第2次調査』 昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1987年 |
| 斎木 岩2010   | 『出合遺跡第37・38次調査』 平成19年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 2010年     |
| 須藤 宏1996   | 『高津橋・岡遺跡第4次調査』 平成5年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1996年       |
| 口野博史2000   | 『玉津田中遺跡発掘調査報告書』 神戸市教育委員会 2000年                      |
| 前田佳久1997   | 『二ツ屋遺跡第1次』 平成6年度度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1997年          |
| 丹治康明1983   | 『北別府遺跡』 昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1983年             |
| 稻原昭嘉2003   | 『太寺施寺跡第4次』 平成13年度明石市埋蔵文化財年報 明石市教育委員会 2003年          |
| 稻原昭嘉2002   | 『北王子遺跡確認調査』 平成12年度明石市埋蔵文化財年報 明石市教育委員会 2002年         |
| 吉田南調査隊1976 | 『吉田南遺跡調査実績報告(第1・2次調査)』 吉田・片山遺跡発掘調査団                 |
| 宮本 博1994   | 『明石公園内出土遺物-特に「古代山陽道」に関する』歴史と神戸第33巻第4号 神戸歴史学会 1994年  |
| 山下俊郎1990   | 『明石市天文町1丁目出土の木町式軒平瓦』 今里幾次先生古希記念播磨考古学論叢 1990年        |

## 第III章 調査の概要

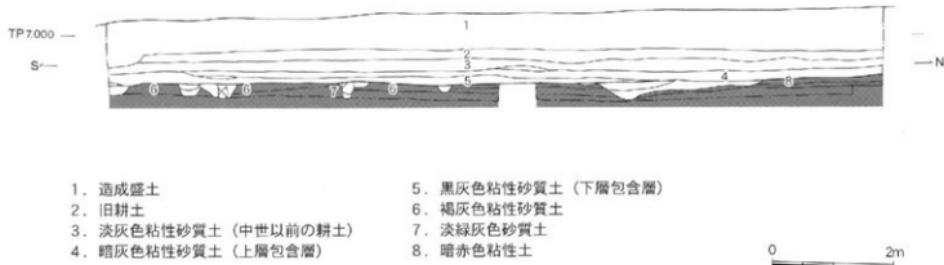
### (1) 調査の経過

調査は、重機械により建設予定地全域について造成土を除去した。調査は、排出土の仮置き地の関係から、まず調査区の東側約3分の2の部分から実施し、東側部分調査終了後、西側3分の1を調査実施した。調査坑は、地中基礎および地中梁工事が実施される範囲について設定した。結果、調査区北東部の一部を除き、格子目状の調査坑を設定し、重機械により旧耕土および近世耕作土層を除去して遺物包含層上面まで掘り下げた。

遺物包含層の除去は人力により実施した。遺物包含層は上下2層に分かれることが確認できたが、下層の黒灰色粘性砂質土上面では遺構は確認できなかった。しかし、下層の遺物包含層除去中に数点ではあるが、上層の暗灰色粘性砂質土に含まれる平安時代中期以降に属すると考えられる土師器片・須恵器塊底部などが出土しており、下層包含層上面から掘り込まれた遺構内の遺物が混入している可能性が考えられた。したがって上層から掘りこまれた遺構も下層遺構面に存在することも考えられた。遺構の検出は、平板測量を実施しつつ掘形内部の精査を進め、一連の建物ごとに土層断面図を作成した。一部の建物掘形内では柱材が良好な状態で遺存しており、記録作業の後、保存科学担当学芸員の指導を得て取り上げ、保存処置を講じ、樹種同定等を実施した。

### (2) 基本層序

調査区内(T.P7.30m~7.70m)は70cm~100cm前後の造成土によって盛り土され、その下に旧耕作土・近世以前の耕作土と考えられる淡灰色粘性砂質土が堆積している。その下層現地表下130cmに平安時代中期～鎌倉時代の遺物を含む暗灰色粘性砂質土を検出した。この平安時代中期以降の遺物包含層は調査区の北東側にのみ厚さ25cm前後で堆積しており、調査区全域には、下層に奈良時代後期から平安時代前期の土器・瓦を含む黒灰色粘性砂質土が厚さ10cm~20cmで広がっている。また、調査区の中央部から北西部においては、炭化物および遺物を含む暗茶色粘性砂質土を遺構面上で検出し、遺構検出を試みたが不分明であり、検出遺構はすべて下層の暗黄褐色粘性砂質土および褐灰色粘性シルト上面に掘り込まれた状態で検出されることとなった。遺構面は、おおむね南北方向に緩やかに傾斜し、調査区北半では暗黄褐色粘性砂質土、南半では褐灰色粘性シルト面であり、T.P6.00m~6.20mを計測する。



第5図 調査区西壁土層断面図



第6図 調査区設定図



第7図 調査区遺構配置図

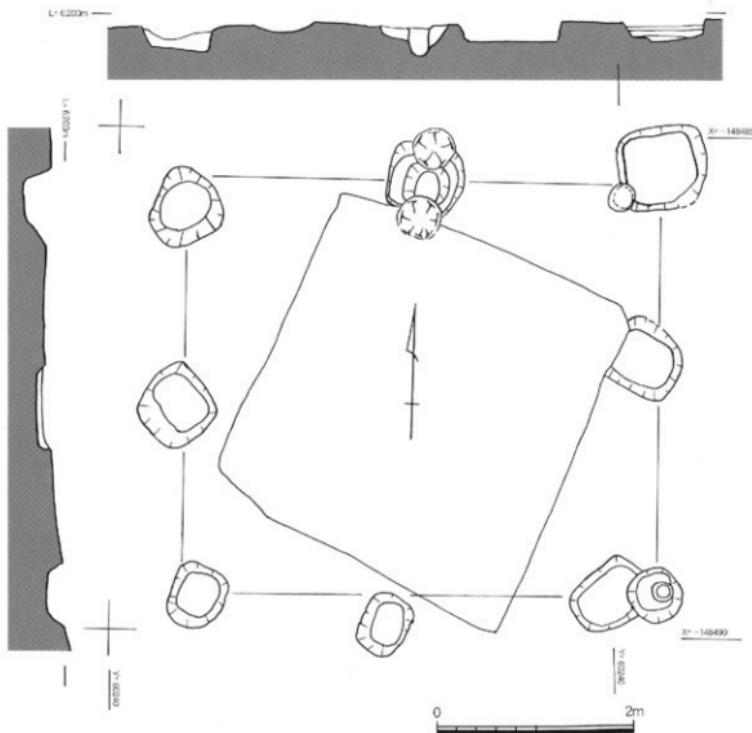
## 第1節 検出遺構

調査は地中基礎掘削部分に限定されたため、掘立柱建物の検出については平板測量を実施しつつ検出に努め、未調査部分については推定復原を行なった。その結果、調査区全域で掘立柱建物12棟、溝及び河川状造構29ヶ所、性格不明土坑1ヶ所が検出されている。

### (A) 掘立柱建物

#### SB01

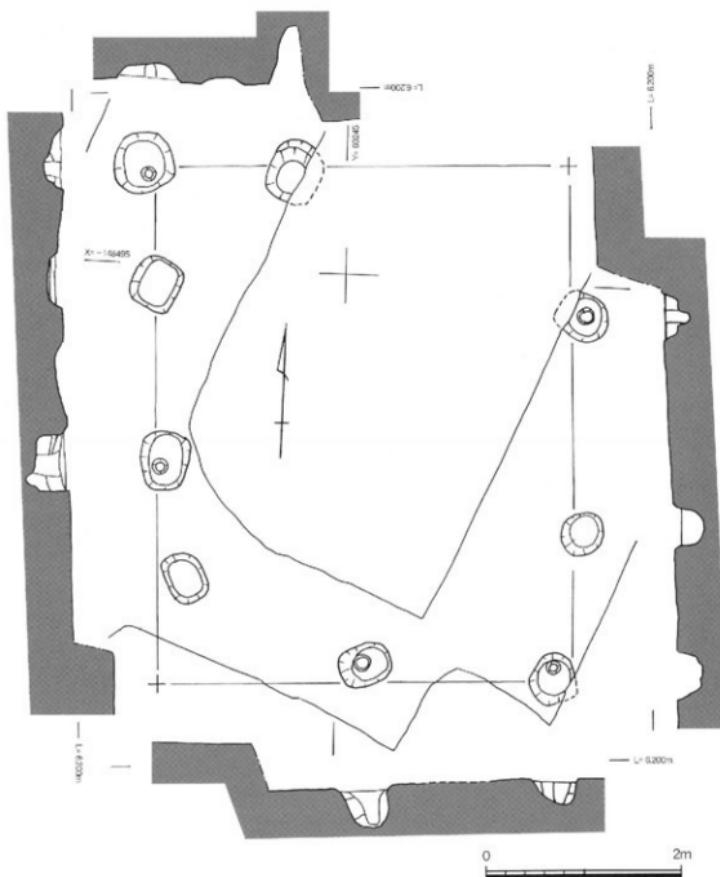
調査区北西部で検出した東西4.8m、南北4.2m、2間×2間と推定される掘立柱建物である。棟方向は明らかでないが、建物の方位は北 $1^{\circ} 30'$ 西ではほぼ真北方向である。柱間隔は南北で2.1m等間、東西では北側で2.4m等間、南側で東より2.7m+2.1mでやや間柱が西に偏る。柱掘形は一辺60cm~70cmの方形に掘り下げている。掘形の深さは、南北辺の間柱で30cmを計測するが、他は20cm前後を残すのみで浅い。南東の隅柱ではやや東側に柱が据えかえられ、柱材(第31図-170)が残存していた。なお出土遺物は、北東隅柱からは須恵器蓋(1)の完形品が出土している。なお南北辺の間柱では柱痕跡が確認され、北辺の間柱では掘形内から多量の製塩土器が出土している。



第8図 SB01平面図及び断面図

## SB02

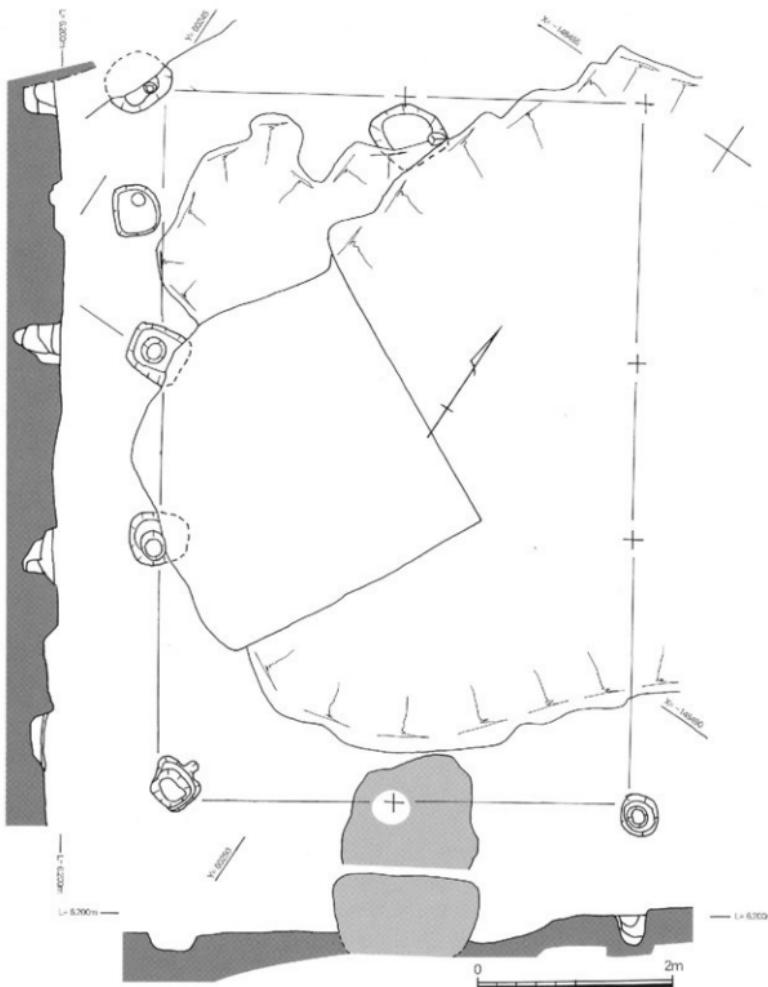
調査区中央部南東よりで検出した東西4.2m、南北5.4m、2間×3間と推定される南北棟の掘立柱建物である。南西隅柱および北東隅柱は調査区外であり未確認である。建物の方位は棟方向が北 $1^{\circ}30'$ 西でほぼ真北を探る。柱間隔は西辺で北から1.5m+1.8m+2.1m、東辺で北から1.5m+2.1m+1.8mである。梁方向の南辺は2.1m等間、北辺で西より推定1.5m+2.7mで、北側に幅1.5mの出入口が想定される。柱掘形は一辺50cm~70cm前後の隅丸方形で、一部で柱の据え替えのための柱掘形の重複がみられる。掘形の深さは40cm前後を残し、それぞれ柱痕跡は明瞭である。掘形のうち北辺間柱の掘形は深さ60cmを計測し、また南辺間柱も掘形の深さは40cmと側柱と比較して深く掘られている。出土遺物は、北辺間柱の掘形内から鉛釉陶器皿片(4)が出土している。



第9図 SB02平面図及び断面図

## SB03

調査区北東部で検出した東西7.2m以上、南北4.2m以上、3間以上×2間以上と推定される南北棟の掘立柱建物である。北辺は現代の擾乱によって滅失しているが、現在確認できる北東部の柱はかろうじて残存していた。建物の方位は棟方向で北 $33^{\circ} 30'$ 西に採る。柱間隔は西辺で北から2.7m+1.8m+2.7m、西辺で2.1m等間と推定され、北側梁柱がやや内側に偏る。柱掘形は一辺60cm

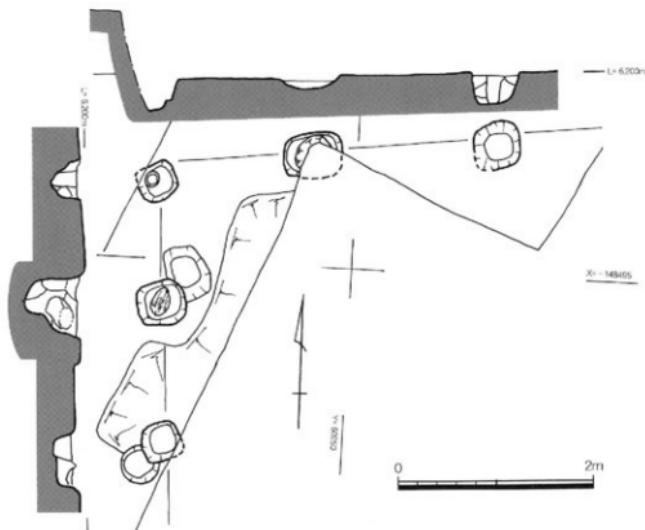


第10図 SB03平面図及び断面

前後の隅丸方形である。掘形の深さは40cm前後を残している。出土遺物は、北西隅柱掘形から須恵器坏A(11)、西側柱北から2番目の柱掘形からは土師器皿(12・13)と共に二次焼成を受けた丸瓦片(143)、南東隅柱掘形からは綠釉陶器坏底部片(5)が出土している。

#### SB04

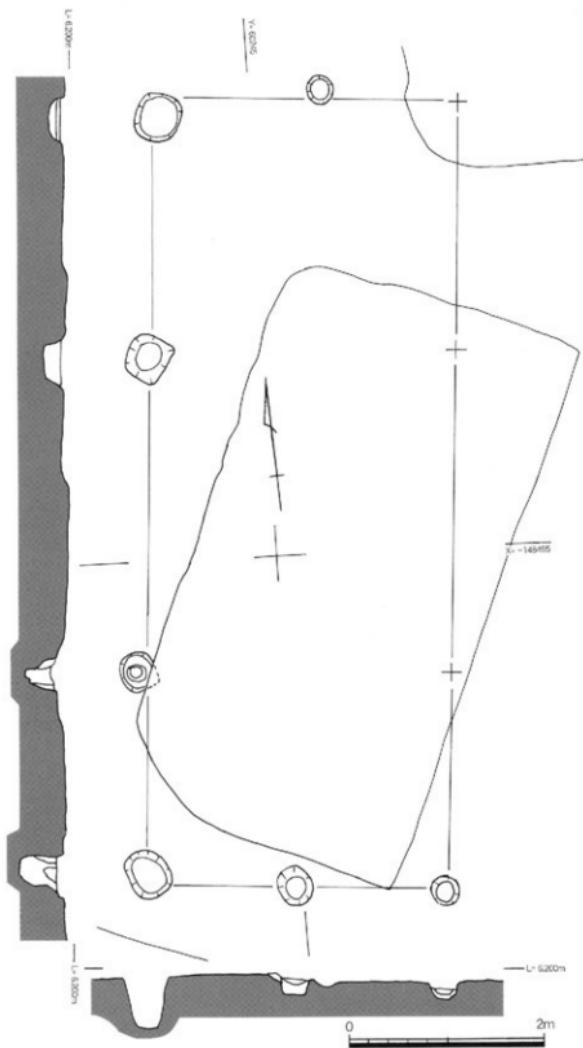
調査区中央東辺で検出した東西3.3m以上、南北3.0m以上、2間以上×2間以上と推定される棟方向不明の掘立柱建物である。建物の東側と南側は調査区外となる。建物の方向は、棟方向が明らかでないが北 $1^{\circ} 30'$ 西でほぼ真北を探っている。柱間隔は、北辺で西から1.5m+1.8m、西辺で1.5m等間を計測する。柱掘形は一辺50cm~70cmの隅丸方形で、西辺の柱掘形において柱据え替えのための掘形の重複がみられる。掘形の深さは30cm前後で柱痕跡をよく残す。そのうち西辺の間柱では深さ60cmの柱掘形に直径約30cmの柱材(第31図-171)が長さ約50cm残存していた。出土遺物は、西辺の柱掘形内から須恵器坏B底部(14)、土師器皿A II(15)が出土している。



第11図 SB04平面図及び断面図

#### SB05

調査区中央部南東よりで検出した東西3.1m、南北8.2m、2間×3間と推定される南北棟の掘立柱建物である。建物の東辺は南東隅柱を確認して推定した。建物の方位は棟方向で北 $8^{\circ}$ 東に探る。柱間隔は西辺で北から2.7m+3.3m+2.1m、南辺で西より1.6m+1.5mを計測する。柱掘形は一辺30cm~40cm前後の隅丸方形である。柱掘形の深さは20cm~50cmで西辺側柱では南に行くにしたがって深くなる。南辺の柱および北辺の梁柱は深さ20cmを計測し浅い。出土遺物は西側柱掘形より土師器坏C片(17)、須恵器坏B蓋片(16)が出土している。

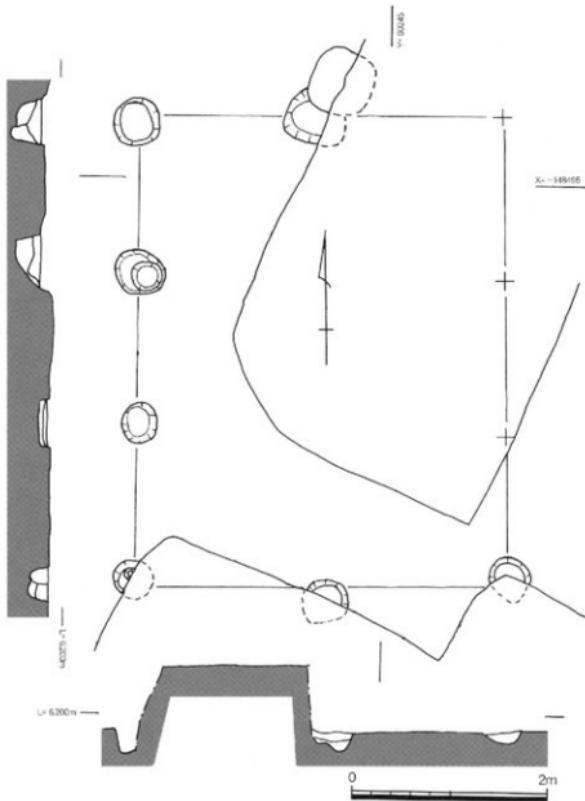


第12図 SB05平面図及び断面図

**SB06**

調査区中央部南東より検出した東西3.8m、南北4.8m、2間×3間と推定される南北棟の掘立柱建物である。建物の北・東は調査区外となる。建物の方位は棟方向が北 $1^{\circ} 30'$  西ではほぼ真北を

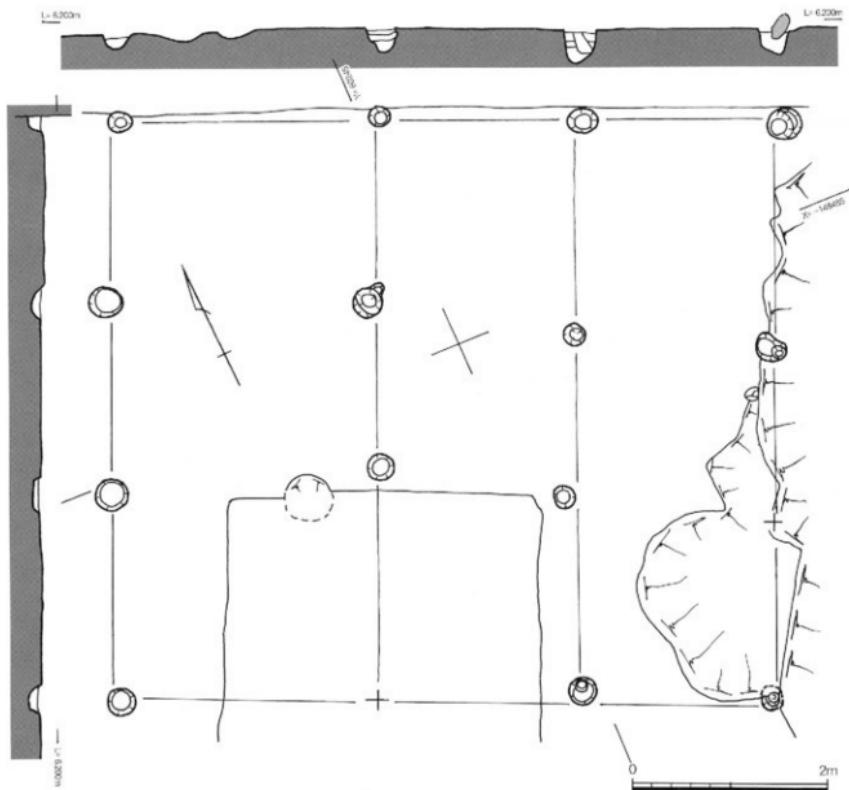
採る。柱間隔は西辺で1.6m等間、南辺梁間で1.9m等間を計測する。柱掘形は直径40cmの円形乃至は一辺45cmの方形に掘り下げる、掘形の深さは15cm~45cmを計測する。梁間の間柱はやや外側に偏る。なお北側の梁柱はSB02の梁柱によって切られている。出土遺物は、西側桁柱掘形内から土師器環C片(19)、須恵器環BⅡ片(18)が出土している。



第13図 SB06平面図及び断面図

### SB07

調査区北東部で検出した東西6.9m、南北6.0m、3間×3間以上と推定される総柱の掘立柱建物である。北側の調査区外に継続する可能性もある。建物の棟方向は不明であるが、建物の方位は北28° 東を探る。柱間間隔は、北辺で西より2.7m+2.1m+2.1m、西辺で北より1.8m+2.1m+2.1mを計測する。柱掘形30cm前後の円形で、掘形の深さは20cm~30cm前後で、一部に河原石を据えて柱を建替えている。建物内の東柱は南北の柱筋が通るが東西方向は不揃いである。また、建物の中

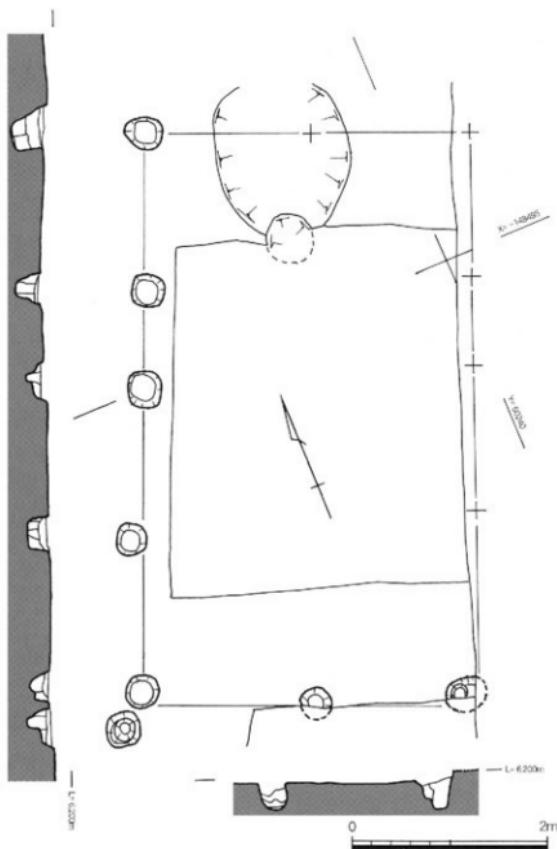


第14図 SB07平面図及び断面図

央北よりに柱筋に沿って「コ」字形にめぐる浅い溝(SD01・SD02)があり、SB07に付属する施設と考えられる。溝内からは、須恵器環高台付底部片(48)が出土している。

### SB08

調査北西部で検出した東西3.3m、南北5.4m、2間×4間と推定される南北棟の掘立柱建物である。建物の東辺はI区調査区のトレンチ西辺にあたり検出できなかった。建物の方位は北28° 東を採る。柱間間隔は、南辺で西より1.8m+1.5m、西辺で北より1.5m+0.9m+1.5m+1.5mを計測する。柱掘形30cm前後の円形で、掘形の深さは20cm~30cm前後である。柱掘形内より須恵器高台付塊底部片(20)・須恵器片が出土している。



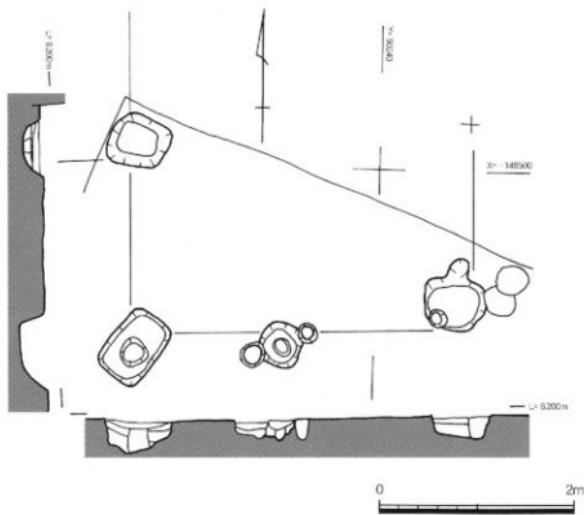
第15図 SB08平面図及び断面図

**SB09**

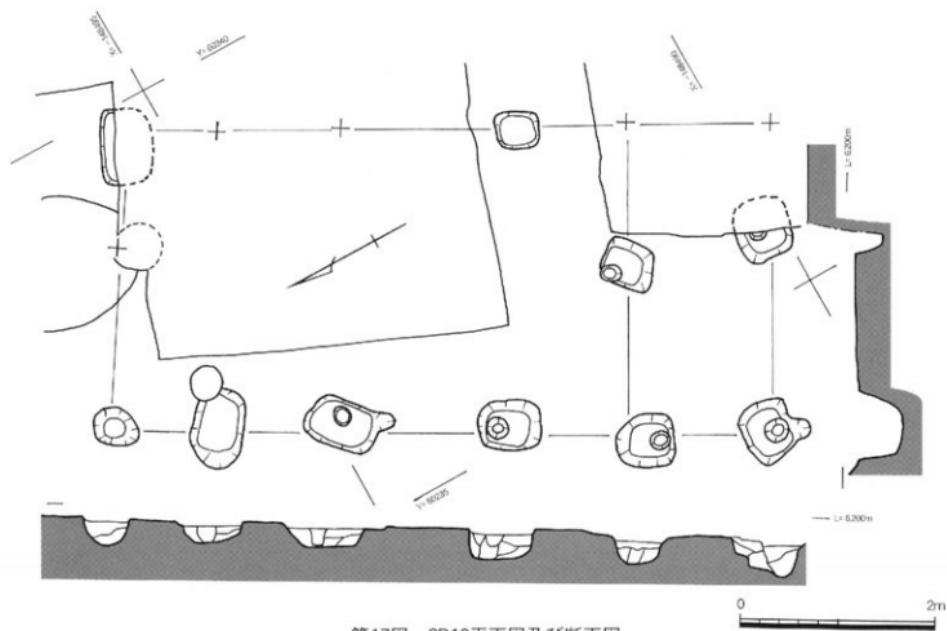
調査区の北西部で検出した東西3.3m以上、南北2.3m以上、2間以上×1間以上と推定される掘立柱建物である。建物の棟方向は不明であるが、建物の方位は北 $2^{\circ}$ 西ではほぼ真北を採る。柱間間隔は、南辺で西より1.5m+2.1m、西辺で2.1mを計測する。柱掘形は一辺50cm前後の方形で、南北隅柱は50cm×80cmの長方形である。掘形の深さは20cm～30cm前後で、一部に柱の据え替えがみられる。柱掘形内より土師器片・須恵器杯口縁部片(21)が出土している。

**SB10**

調査区北西部で検出した東西3.6m、南北6.0m、5間×2間と推定される南北棟の掘立柱建物である。建物の方位は北 $30^{\circ}$ 東を採る。柱間間隔は、西辺で北より0.9m+1.2m+1.5m+1.2m+1.2m、南辺で1.2mを計測する。南辺側で1.2mの出で庇がつくられている。柱掘形は一辺50cm前後



第16図 SB09平面図及び断面図

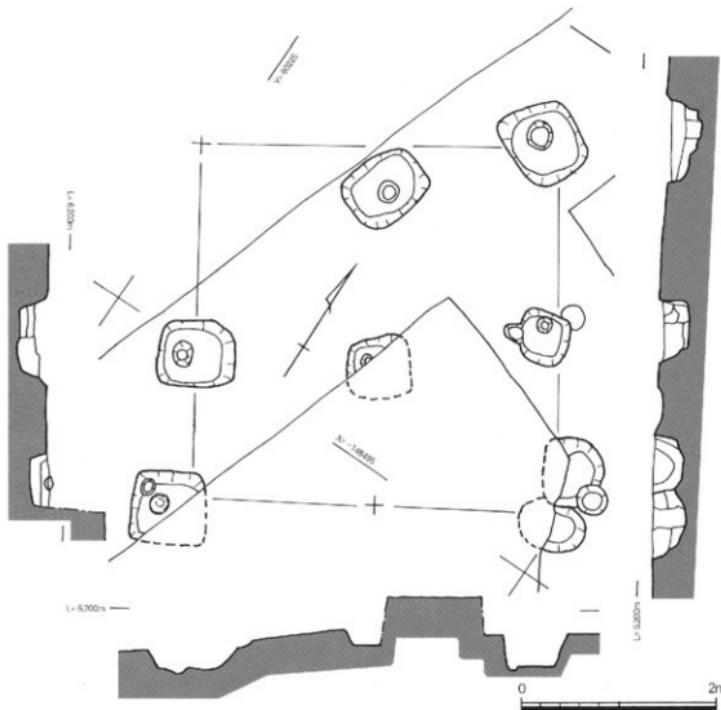


第17図 SB10平面図及び断面図

の方形で、掘形の深さは20cm～30cm前後残っている。柱掘形内より土師器皿片(22)が出土している。

### SB11

調査区南西部で検出した東西3.6m、南北3.6m、2間×2間と推定される総柱の掘立柱建物である。建物の棟方向は不明であるが、建物の方位は北33°西を採る。柱間間隔は、北辺で西より1.5m+2.1m、西辺で北から1.5mを計測することから、柱間間隔はすべて1.5m+2.1mと考えられる。柱掘形は一辺75cm前後の方形で、掘形の深さは20cm～30cm前後を残し、隅柱と考えられる柱掘形はいずれも比較的深い。南側間柱の柱掘形内より土師器塊の完形品が出土しているほか、各柱掘形から土師器皿片(23)、坏B底部片(25)、須恵器坏B底部片(26)が出土している。

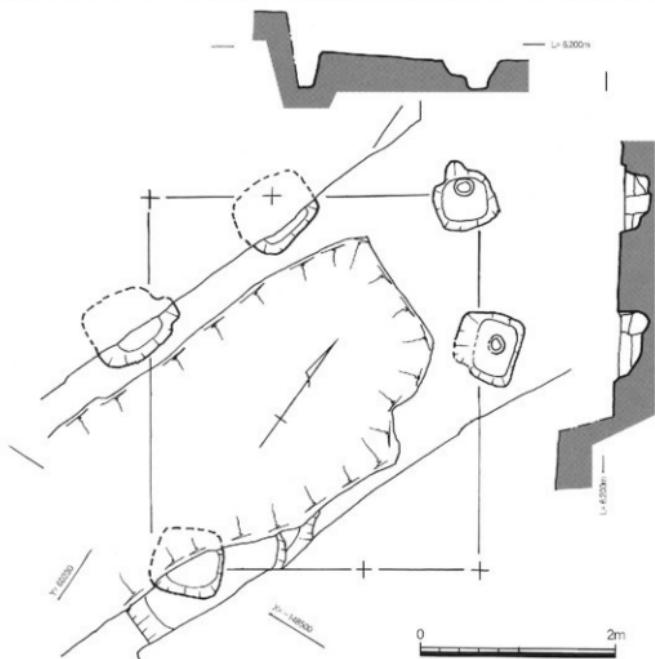


第18図 SB11平面図及び断面図

### SB12

調査区南西部で検出した東西3.6m、南北3.9m、2間×2間以上と推定される掘立柱建物である。南側に伸びる可能性もある。建物の棟方向は不明であるが、建物の方位は北33°西を採る。柱間間隔は、北辺で西から1.2m+2.1m、と東辺で北から1.8m+2.1mを計測することから柱間間隔は南北辺と東西辺は同間隔と考えられる。柱掘形は75cm前後の方形で、掘形の深さは20cm～40cm前後

を残し、隅柱と考えられる柱掘形はいずれも比較的深い。南東隅柱掘形内はSX201埋没後掘りこまれ、掘形埋土としていることから須恵器・土師器片が多量に出土しているが、岡化できる上器はない。



第19図 SB12平面図及び断面図

### (B) 河道・溝及び鋤溝状遺構

#### 河道1

調査区中央で検出した西に流れる河道である。各調査地区ごとに溝(SD)として検出したため東からSD10・SD09、調査区西部でSD25として検出した河状落ち込みがこれにあたる。この東西の落ち込みは調査区東部中央東よりを始点とし、調査区東端では検出されなかった。

SD10は調査区東部中央で検出した幅1.7mで北肩が緩やかに落ち込み、底部で南肩よりに幅40cm、深さ15cm前後の溝状遺構となっている。深さ40cm前後を計測する。

SD09は調査区東部西端で検出した幅2.5mでSD10同様に北肩が緩やかに落ち、南肩よりに幅1.5m、深さ40cm前後を計測する。いずれも下層遺物包含層(黒灰色粘性砂質土)上面から落ち込み、埋土は底部で褐色砂礫、上層に暗灰黑色粘性シルトが堆積している。上層堆積土層からは平安時代前期の遺物と鎌倉時代に属する須恵器・陶器片が出土している。

SD25は調査区西部中央を蛇行して西に流れる河状の落ち込みである。幅2.2mで北肩が緩やかに落ち込み、底部で南肩よりに幅1.4m、深さ20cm前後の溝状遺構となっている。深さ30cm前後を計測する。

いずれも下層遺物包含層(黒灰色粘性砂質土)上面から落ち込み、埋土は底部で褐色砂疊、上層に暗灰黑色粘性シルトが堆積している。上層堆積土層からは奈良時代後期～平安時代中期の遺物が出土している。

## 河道2

調査区北部中央でSD03として検出した北東から南西に流れる河状の落ち込みである。調査区西部で溜り状の落ち込みとなる。河道の底部を検出しているため数条の溝状落ち込みとして検出した。幅2.2m前後、深さ20cm前後を計測し、埋土は灰褐色シルト質細砂である。埋土内から須恵器環B、土師器塊、皿、壺底部が出土している。なお、河道埋没土除去後、河道底でSB07の柱掘形を検出した。

## 溝(SD01・SD02・SD17)

東西溝SD17、L字形のSD02と南北溝SD01からは平安時代中期の須恵器片が出土した。これらの溝は幅20cm前後、深さ5cm～10cmを計測し、断面形はU字形をしている。これらは、SB07に付属する溝と考えられる。

## 溝(SD21)

調査区東部南辺で検出した東西方向の素掘りの溝である。調査区南西隅から痕跡を残し、幅1.0m、深さ12cmを計測する。溝の方位は北62°西を採る。断面形は底幅の平坦なU字形である。埋土内から奈良時代前期の須恵器環B(44)が出土している。

## 溝(SD26)

調査区西部の中央部を東西にのびる断面U字形の素掘り溝で幅30cm、深さ5cm前後を計測する。東側は擾乱坑によって壊滅しているが、さらに東・西へは連続していない。溝内から須恵器环身B(45)片が出土している。

## 溝(SD28)

調査区西部南辺で検出した東西方向の素掘りの溝である。調査区南西隅から痕跡を残し、幅0.5m以上、深さ20cmを計測する。溝の方位は北62°西を採る。断面形は底幅の平坦なU字形である。

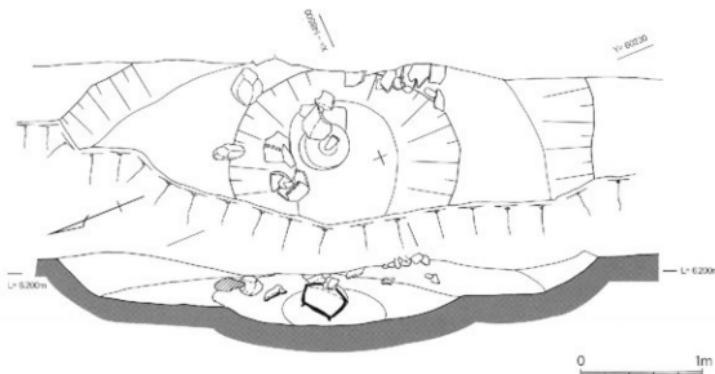
## 鋤溝状遺構

調査区北部全域で検出した南北方向に平行する幅30cm～40cm、深さ10cm～20cm前後の溝状遺構を検出した。断面形は皿状をしている。これらの溝状遺構はトレンチ調査という条件もあり、調査区内で17ヶ所検出した。いずれの溝状遺構も調査区内において連続性がなく、掘立柱建物の掘形等に切られる状況で検出した。埋土内からは、掘立柱建物掘形内から出土する遺物と同様の奈良時代後期～平安時代前期の須恵器・土師器(SD12出土49・50)が出土している。検出状況から所謂鋤溝状遺構の可能性があり、建物建設時の排水施設のような地業の痕跡と考えられる。

## (C) 土坑

### SX01

調査区西部南東よりで検出した性格不明の土坑である。東側が調査区外、西側が擾乱坑によって壊滅しているため、規模及び形状は不明な点が多いが、南北2.2m、東西0.7m、深さ35cm前後の梢円形土坑と推定される。土坑のほぼ中央で直径1.0m前後の円形に深さ10cm程度掘り込まれ、この部分に土師器塊・須恵器長頸壺胴部などが据えられたように埋置されていた。



第20図 SX01平面図及び立面図

## 第2節 出土遺物

遺物の量は28ℓコンテナ14個分、ビニール袋にして412点出土している。その内容は須恵器・土師器の土器類が大多数をしめるが、中には綠釉陶器・灰釉陶器・丸瓦・平瓦、中近世の陶器、鉄製品、土製品、石製品が含まれている。これらの大部分が遺物包含層と掘立柱建物柱掘形内・土坑・河道および溝内から出土している。

なお、土器類の概要を記述するにあたっては、古代の土器研究会編『古代の土器1』「都城の土器集成」における器種分類に則り記録・整理作業を行った。したがって、同一器種の場合、推定可能な限り復元を試みている。図上復元部分は破線で表示した。

### (1) 土器及び陶器類

#### (A) 掘立柱建物

##### SB01

須恵器蓋(1)はSB01の柱掘形1西肩内側に接して検出した完形品の壺B I蓋である。天井部は粗くヘラ削りし、扁平なつまみをつくり、つまみ頂部はくぼませ、宝珠形は退化している。口縁部は丸く仕上げはやや内に折り曲げ内傾する端面をつくる。内面全体をロクロナデのあと中央部に仕上げナデを行う。須恵器蓋(3)は柱掘形2から出土した壺B II蓋である。天井部を欠くが、粗くヘラ削りして屈曲する体部に外反する口縁部をつくる。内面は蓋(1)と同様に全体をロクロナデしたあと中央部に仕上げナデを行う。須恵器皿(2)は蓋(3)と伴に柱掘形2から出土した。平坦な底部から角度をもって体部を立ち上げ、口縁部を水平につまみ出して端部としている。調整は、内外面ともロクロナデのあと、底部外面に仕上げナデをおこなう。

SB01柱掘形内からは、柱掘形2から製塙土器(第27図129・130・131)、柱掘形3から製塙土器(第27図128)が出土している。

**SB02**

須恵器坏(7)は直線的に立ち上がる体部直下にやや外方に踏ん張る付け高台をつくる。底部は大半を欠くが、へラきりをおこなう。鉛釉陶器皿(4)は、高い輪高台に直線的に立ち上がる体部つくる。底部中央を除く内外面を褐色の釉薬が施されている。小破片であるが、ほぼ全形を復元できる。緑釉陶器底部(5)は小型の輪高台をつける皿もしくは壺の底部と考えられる。土師器皿A(6)は外反する体部に、水平に外方向に拡張して口縁部をつくる。土師器皿A(7)はやや丸い底部から外反する体部をつくる。口縁部は平坦面をつくり沈線を巡らせる。須恵器坏(8)は外に踏ん張る付け高台から直ちに直線的に立ち上がる体部をもつ。札馬古窯址群1号窯出土品に類例がある。坏A(9)はへラ削りで平坦な底部をつくり、やや内窓気味に立ち上がる体部を強くなじて平坦面をなす口縁部をつくりだす。皿A(6・7)、坏A(9)は口縁部を強くなじて外反させる。底部はへラ削りして平坦につくる。いわゆるe手法をもちいている。坏底部(10)は焼成のあまい、軟質の須恵器である。その他に柱2から製塙土器(第27図131)が出土している。

**SB03**

須恵器坏A(11)はへラきりして未調整の底部に上方に立ち上がる体部をつくる、底部内面も未調整である。土師器皿A(12)は口縁部端に内傾面をつくり、凹線状になっている。土師器皿A(13)は平坦な底部に、短く体部を立ち上げ、口縁部は外側に水平につまみだして平坦面をつくる。土師器皿A(12・13)ともいわゆるe手法をもちいている。

**SB04**

須恵器坏B(14)は低くほぼ垂直の高台に、丸く内弯する体部をつけると考えられる。皿A(15)はSB02(6)と同様な形態の小皿である。

**SB05**

須恵器蓋(16)は天井部が平坦なつくる大型の蓋である。須恵器坏C(17)は底部を尖り気味につくり、口縁部はやや上方につまみあげて、内面に凹面をつくる。

**SB06**

須恵器坏B(18)はやや外に踏ん張る高台に、直線的に立ち上がる体部をつくる。土師器坏C(19)は、底部を平坦につくり、外反する体部をつけ、口縁部はつまみあげて凹面状の内傾面をつくる。調整はe手法をもちいている。

**SB08**

須恵器碗高台(20)はやや外下方に踏ん張る高い高台片である。見込みの狭い塊の高台と考えられる。

**SB09**

須恵器口縁部(21)は須恵器坏Bと考えられ、SB02坏B(8)と同形態と考えられる。

**SB10**

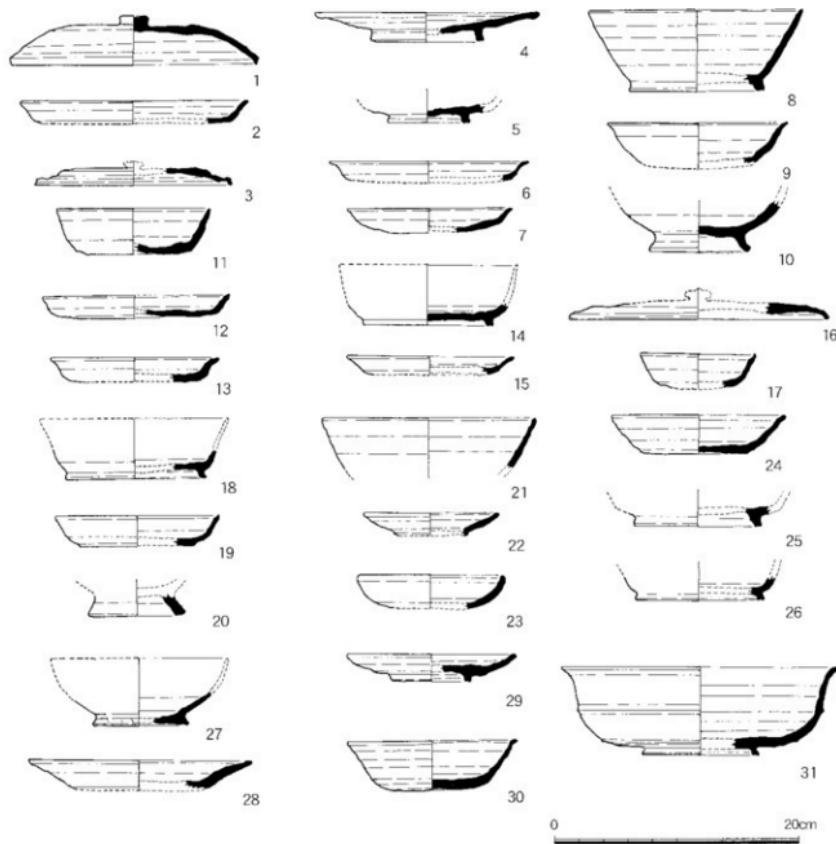
土師器皿(22)は、施釉陶器の皿の形態を探る平高台の小皿である。

**SB11**

土師器皿(23)は丸い体部をもつ、体部下半から底部はへラ削りをおこなう。土師器A坏(24)は、SB11柱6から出土した完形品である。へラきりで平坦に仕上げられた底部にやや外反する口縁部を作りつけている。土師器坏B底部(25)は、高めの高台に稜塊のように立ち上がる体部をつくると考えられる。須恵器坏B(26)はやや踏ん張る短い高台際からやや内窓気味に立ち上がる体部をつくると考えられる。

### Pit及び柱掘形

須恵器塊(27)は、Pit25から出土している。板状高台に内弯する口縁・体部をつくる。ヘラきりされた高台部は指オサエによって外下方に拡張される。土師器皿B(28)はPit62から出土している。口縁部は内側に摘み上げて凹面をつくる。高台部は欠損している。灰釉陶器皿(29)は低い貼り付けの輪高台に短くやや内弯気味に立ち上がる体部をつくる小型品である。Pit55から出土している。須恵器環A(30)はPit230から出土している。底部はヘラ削りによって仕上げられ、やや内弯気味に立ち上がる体部に外上方につまみ出して口縁部をつくる。Pit223出土の綠釉陶器陵碗(31)は、低く短径の外踏ん張りの輪高台に丸い体部を設え、上方に外反する口縁部をつくる。稜によって口縁部と体部が画される。体部外面中央に重ね焼の痕跡が確認できる。



第21図 挖立柱建物出土土器実測図

### (B) 河道・溝及び鋤溝状遺構

#### 河道1

軟質の灰白色の須恵器塊(32)である。回転糸切りの板状高台に直線的に立ち上がる口縁・体部をつくる。札馬古窯址群5号窯などに同一形態の碗がある。須恵器皿A(33)は底部をナデて平坦につくり、短く直線的な口縁・体部を設える。

須恵器皿B I(34)は直線的にのびる体部をもつ直径28.4cmの大型品である。須恵器蓋(35)はヘラ削りで仕上げた天井部に鍵形に屈曲する口縁部をつける。内面中央は仕上げナデをおこなう。土師器蓋A(40)は短く「く」字に弯曲する口頸部に張りのない胴部が続く。口縁部はややつまみあげて面をなす。内外面ともナデ、刷毛目仕上げを行う。

須恵器塊底部(36)は回転糸きりでつくる。薄い仕上げの須恵器である。須恵器塊底部(37)は回転糸きりをおこない、底部は凹面となる。(36・37)とも軟質で乳白色をしている。土師器壺A(38)は丸い体底部にやや外反する口縁部をつくる。全体にロクロナデによる仕上げをおこなう。土師器壺A(39)は丸い体底部に外反する口縁部をつくる。口縁部はロクロナデ、体底部は指オサエとヘラ削りで仕上げる。

#### 河道2

土師器皿(41)厚手の皿である。口縁部を強くナデ、底部はヘラ削る。土師器塊A II(42)は平底にやや内弯気味に立ち上がる体口縁部をつくる。体部下半と底部はヘラ削り、口縁部は強くナデル。須恵器壺高台部(43)は乳白色を呈し軟質で外に踏ん張る高台をつける。

#### 溝(SD01)

須恵器壺B(47)は低い外に踏ん張る高台から直ちに弯曲した内弯気味に立ち上がると考えられる壺身片である。須恵器壺底部(48)は外に踏ん張る高い高台に見込みの狭い体部をつくる壺身片である。色調は乳灰色を呈し、焼成度はあまり。札馬古窯址群5号窯に類例がみられる。

#### 溝(SD21)

須恵器壺B II(44)は直立する付け高台より少し間をおいてやや内弯気味に立ち上がる。

#### 溝(SD26)

須恵器壺B III(45)やや外に踏ん張る低い高台より直ちに弯曲してほぼ直立した体・口縁部をつくっている。須恵器壺(46)はやや外に踏ん張る付け高台から直ちに直線的に体部が立ち上がる。札馬古窯址群1号窯出土品に類例がある。

#### 鋤溝状遺構

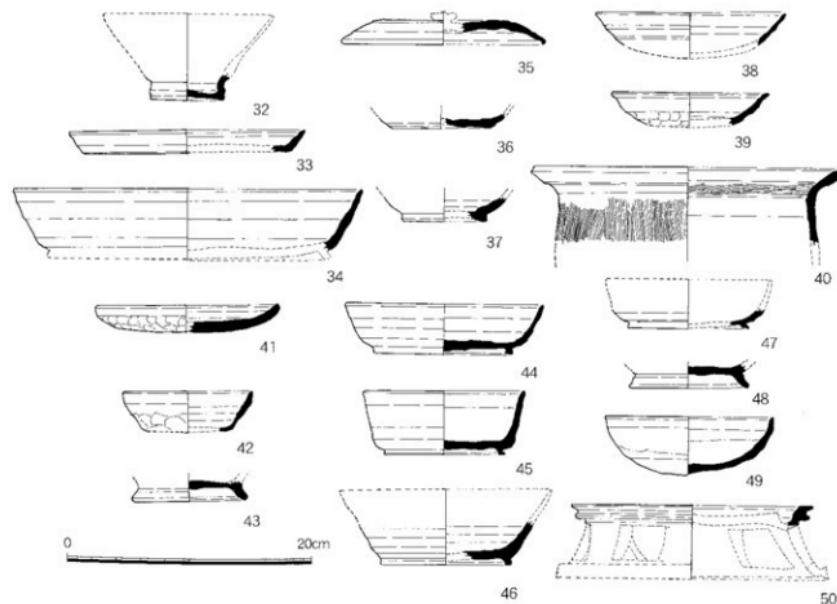
土師器壺C(49)は丸い底・体部に直立する口縁部をつくる。内外面上部に炭素が吸着しており、黒色土器の可能性もある。c手法の調整を行なう。

須恵器円面鏡(50)海部の一部と堤の一部を残す。透かしは幅広の矩形と考えられる。

### (C) 土坑

#### 土坑(SX01)

**須恵器** 須恵器壺B II(51)はやや外に踏ん張る付け高台から直ちに弯曲してたちあがる体部をつくり、やや外反しながら直立する口縁部を設ける。須恵器壺A(53)は上げ底気味の底部の体部との境からやや内弯気味に立ち上がる直立する口縁部を設けると考えられる。須恵器壺B II(54)は(51)と同様の形態で低い外に踏ん張る付け高台をつける。須恵器壺B底部(55)は低く踏ん張る付け高台の端部を外上方につまみ出している。須恵器壺B底部(56)は付け高台の端部を内傾させている。須恵

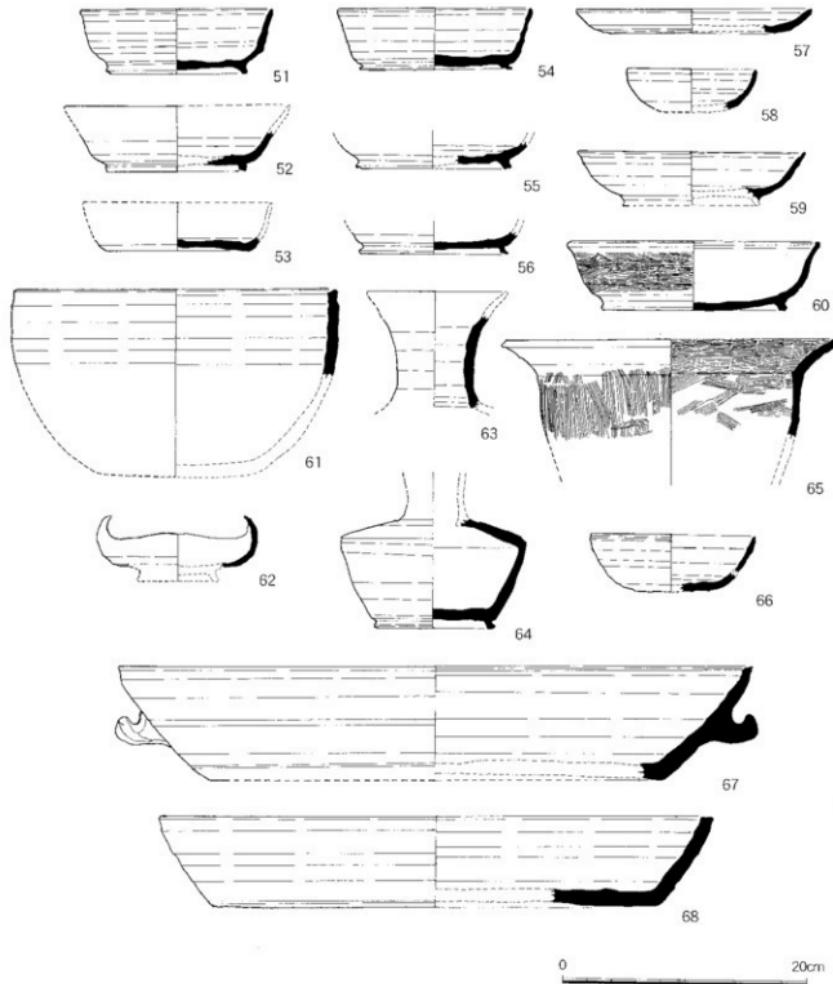


32~40 河道1出土 41~43 河道2出土 44 SD21出土  
45・46 SD26出土 47・48 SD01出土 49 SD12出土 50 SD12出土

第22図 河道・溝出土土器実測図

器鉢(61)は口縁部片で、内湾しながらほぼ垂直にたちあがり、口縁端部は内傾を強くナデてつくりだしている。この鉢(61)は器形から福岡県地別当1号窯出土鉢に類例があり、八世紀前半から中頃に位置付けられている。(石本秀啓2007) 須恵器壺頸部(63)は外面全体に淡い緑色の自然釉が被る。須恵器壺体部(64)の頸部とも考えられる。須恵器壺K体部(64)は長頸壺の体部で、短く外に踏ん張る低い高台を貼り付け、高台から直ちに内湾気味に肩部を立ち上げ、直線的な肩部はやや鋭角的に屈折してやや高い位置に稜をつくり肩部へつづく、その境は肩部端に圓錐状となっている。肩部上面に自然釉が被る。須恵器壺(66)は半底に丸い体部をつくり、やや内湾気味に口縁部を強くナデて外面に四線状にくぼませる。須恵器盤A(67)は、やや内湾して立ち上がる体部に「鍵」形の粘土を貼り付け把手としている。口縁端部はやや内側に拡張して内傾面につくる。須恵器盤(68)は、上げ底気味の底部からやや内湾して立ち上がる体部に、水平な凹面の口縁端部をつくっている。一方須恵器壺B(52)はほぼ直立する短い付け高台から直ちに弯曲しながら、斜め上方にたちあがると考えられる环身片である。須恵器耳皿(62)は耳の部分のみが残る。灰釉陶器と考えられるが、釉を施した形跡はない。これらの須恵器はやや新しい形態であり、SX01を掘り込むSB12掘削埋土からの混入である可能性もある。

**土器器皿** 上師器皿(57)はやや上げ底気味に底部をつくる厚手のe手法で調整する皿片である。土師器皿C(58)丸い体・底部に直立する口縁部を設ける。土師器皿B I (59・60)は丸みをもつ体部に、外下方に踏ん張る低い高台を貼り付け、口縁端部は上方に折りつまみ上げてナデて内面に凹線を施す。(59)外上方にひらく体部をもち、(60)は体部を内弯させ、口縁部を外反させる。土師器皿C (65)は、「く」字に弯曲する口縁部に砲弾形の胴部が続く。口縁部はやや下方につまみ出し面をつくり、内外面ともナデ、刷毛目仕上げを行う。



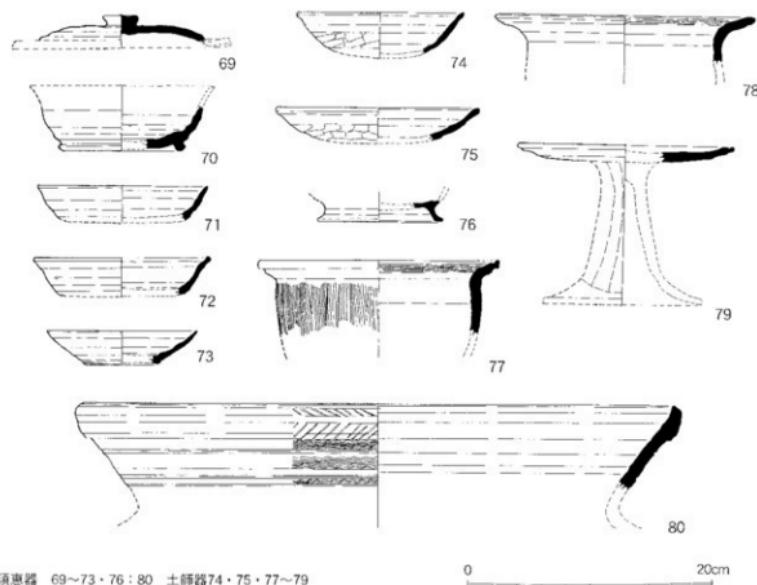
第23図 SX01出土土器実測図

## (D) 遺物包含層

## 茶褐色粘性砂質土(遺構上面)

**須恵器** 須恵器蓋(69)は内窵する大井部を残し、口縁部は屈曲する形態と考えられる。平坦なつまみは中央部でわずかに隆起する。須恵器環B(70)は短く分厚い付け高台が踏ん張る。支点は高台の内側にある。高台より直ちに弯曲して体部が立ち上がり、やや外反する口縁部をつくると考えられる。須恵器環A II(71・72)はやや外反する口縁部をもつ。体部下半をヘラ削りする。須恵器環A(73)は底部はヘラきりにより上げ底状で、板状高台より直線的に体・口縁部をたちあげる。ロクロナデ仕上げで調整している。須恵器環底部(76)は高い外に踏ん張る高台を付ける。乳白色の色調を呈し、非常に軟質である。須恵器壺口頸部(80)は直線的に拡がり口縁端は外下方へ粘土を折り曲げて肥厚させる。外面に3条の凹線をめぐらし、3列の波状文を間につける。口縁肥厚部には綾杉様のヘラ刻列がある。

**土師器** 十師器環A(74・75)は丸い底・体部にやや外反する口縁部をつくる。口縁部下を強くナデ、体部・底部はヘラ削りしている。壺C(77)は「く」字に弯曲する口頸部に砲弾形の胴部が続く。口縁部はやや上方につまみ出し面をなす。口縁部外面をナデ、胴部外面と口縁部内面を刷毛目仕上げを行う。壺C(78)は逆「L」字形の口縁部に垂直にさがる胴部をもつ長胴壺である。高環(79)は環部のみをのこす。环部は浅く、低くやや上方にひろがる。口縁端をつまみ出して口縁内面に凹線がめぐる。復元は『古代の土器1』〔古代土器1992〕の高環例から行った。



須恵器 69～73・76・80 土師器74・75・77～79



第24図 遺物包含層出土土器実測図(1)茶褐色粘性砂質土

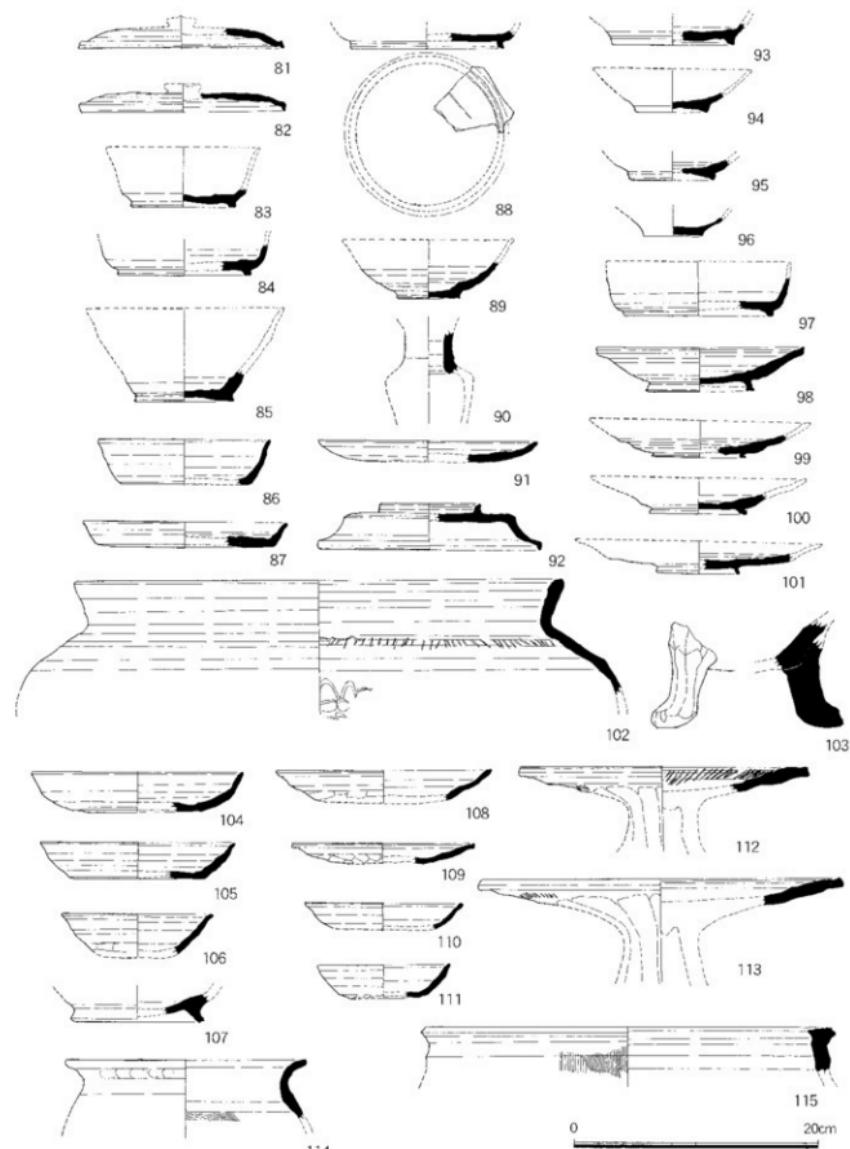
## 黒灰色粘性砂質土(下層遺物包含層)

**須恵器** 須恵器蓋(81・82)は平坦な天井部に弯曲する口縁部をつけ、口縁端部は折り曲げて断面三角形の端部をつくる。須恵器坏B(83・84)はやや外に踏ん張る低い付け高台から直ちに弯曲して立ち上がる口縁・体部を設える。(83)は体部下端で稜をつくり口縁部はやや外反するとみられる。須恵器坏(85)はやや上げ底の板状高台から直ちに直線的に立ち上がる口縁・体部を設える。内面見込み部は通例よりおおきい。回転糸きりによってつくられる。須恵器坏A III(86)はやや上げ底気味の底部からやや内弯気味に立ち上がる体部に少し外反する口縁部を設える。須恵器皿C(87)は平坦で分厚い底部から斜め上方に短く立ち上がる口縁・体部を設える。須恵器坏B(88)は直立する低い付け高台から直ちに弯曲して立ち上がる体部をもつ。底面にヘラによる刻線がみられる。須恵器坏(89)は糸切りの板状高台から弯曲して立ち上がる体部をもつ。底部内面の見込みは緩やかな段で画される。須恵器壺G(90)は口頸部片である。須恵器壺C(102)は短く胴部から立ち上がる口頸部で、丸い胴体部をもつと考えられる。口頸部内面に接合時の絞り痕跡がみられる。須恵器獸脚(103)は広径の盤の脚と推定される。脚の爪先を3ヶ所ヘラで切り込み表現し、ヘラで8面の面取りを行う。

**綠釉陶器** 緑釉陶器皿A(91)は丸い体・底部にはほぼ水平に口縁端部を設える。全面に暗茶緑色の釉薬をかけている。緑釉陶器蓋(92)は平坦な天井部に輪高台状のつまみを設える。体部は天井部から弯曲させ、口縁部はほぼ直角に折り曲げて端部としている。外面全体に暗緑色の釉薬をかけている。緑釉陶器坏B(93)は直立する付け高台から直ちに立ち上がる。緑釉陶器壺(94・95)は削り出し高台にやや内弯気味に立ち上がる体部をつくる。緑釉陶器底部(96)はやや上げ底気味の板状高台を回転糸きりで切り離す。淡緑色の釉がかかる。

**灰釉陶器** 灰釉陶器坏B(97)は、ほぼ直立する短い付け高台から直ちに弯曲し、ほぼ真上に直線的な口縁部をつくると考えられる。灰釉陶器皿(98)はやや外に踏ん張る高い付け高台から少し横にはってやや内弯する体部をつけ、水平気味に外反する口縁部を設える。口縁端部は上方向につまみあげて断面三角形状につけ、外側に凹面をめぐらせる。猿投占窯址群鳴海82号窯に類例があり、猿投窯の灰釉陶器と考えられる。灰釉陶器皿(99・100・101)はいずれも低い付け高台を設える。(99)の高台はほぼ直立し少し外へつまみ出し、体部は高台からやや内弯気味にのびる。(100)は低いながら外へ踏ん張る高台に直線的に斜めにのびる体部を設える。(101)は外に踏ん張る輪高台からほぼ水平に体部をつくり、体部上端で稜を付け外反する口縁部を設えると考えられる。

**土師器** 土師器坏A I(104)は丸い体・底部にやや外反する口縁部を設える。内面底部を仕上げナデし、口縁・体部をナデて、底部をヘラ削りする。土師器坏A(105)は須恵器坏Aの形態を模したものと考えられる。回転ナデ調整を行い、ヘラオコシによって切り離す。土師器塊A(106)は口縁部下端を強くナデて外反させ、底体部下半をヘラ削りする。(105・106)は平安京左京二条二坊冷然院SD1・SD2出土の須恵器坏、土師器塊に類例がある。土師器坏底部(107)は色調が赤褐色を帯び土師器として資料化したが、造構上面出土(76)、SD03出土(43)、SD01出土(48)などと形態が類似する。土師器皿(120・121)は、いずれもe手法の調整を行い、平底の底部から斜め上方に体・口縁部を立ち上げる。底部内面は指オサエによる調整がみられる。土師器皿A(110)、土師器塊A II(111)はいずれもe手法の調整を行っている。土師器高坏(112・113)は低く外方にひろがる高坏の口縁部片である。(112)の内外面はヘラ磨き斜行文、(113)は外面にヘラ磨き斜行文がみられる。土師器壺(114)は緩やかに「く」字に外反する口頸部に丸くおさめる口縁部を設える。頸部は指オサエによって調整し、胴部内面は刷毛目調整する。壺(115)はやや内傾して立ち上がる体部に横につまみ出した逆「L」形の口縁部をつける。内外面とも赤褐色を呈するが焼が堅く須恵器の半製品の可能性がある。



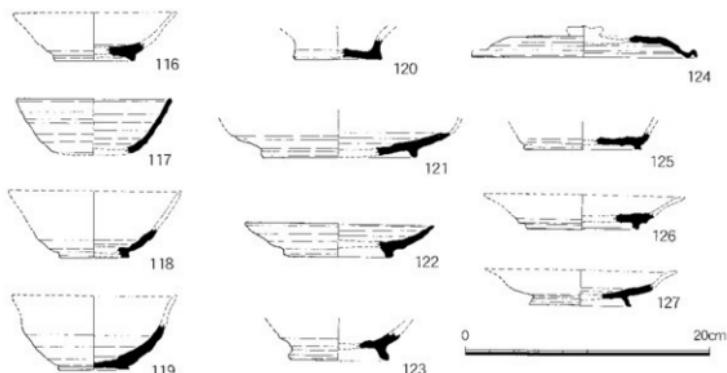
須恵器 81~90・102・103 緑釉陶器 91~96  
灰釉陶器 97~101 土器器 104~115

第25図 遺物包含層出土土器実測図(2)下層包含層

### 淡灰色粘質土・暗灰色粘性砂質土(上層包含層)

**淡灰色粘質土** 細釉陶器塊(116)は削りだし高台に、直線的に立ち上がる口縁・体部をもつと考えられる。須恵器壺底部(120)は回転糸切りを行った板高台に直線的にのびる口縁・体部をもつ壺と考えられる。色調は乳灰色で軟質である。

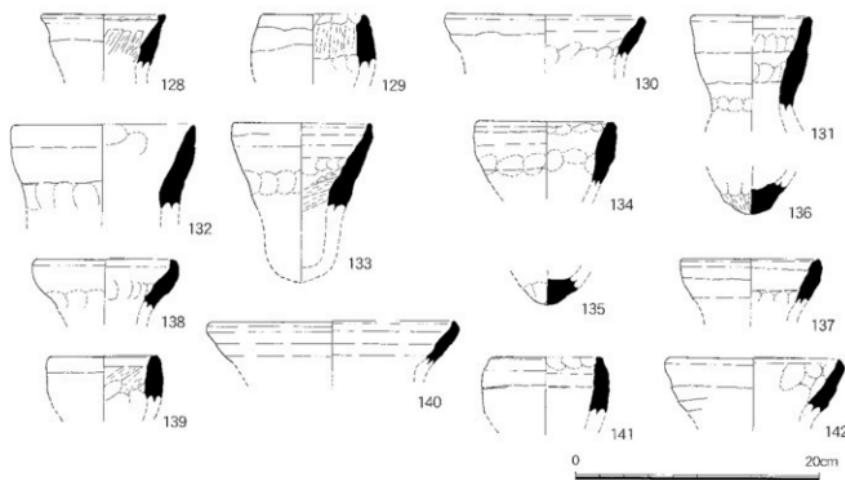
**暗灰色粘性砂質土** 須恵器蓋(124)は、天井部はへら削りされ、弯曲しながら口縁部となる。口縁部は屈折して端部は断面三角形状に屈曲する。須恵器壺A(117)は平底になると考えられる。やや内弯しながら直線的にのびる体部をもつ。須恵器壺(118)は回転糸切りの板状高台にやや内弯しながら直線的に伸びる口縁部をもつと考えられる。内面見込み部は段状に窪められる。須恵器壺(119)はへら切りした板状高台で上げ底氣味の底部となっている。高台から直ちに弯曲して体部が立ち上げられ、口縁部は少し外反すると思われる。内面見込み部は段状に窪められる。須恵器(121)は灰釉陶器Bの底部と考えられるが施釉は認められない。平底の体部に断面三角形の付け高台を設える。体部は付け高台より横に張って立ち上がり稜がつくと考えられる。須恵器塊(122)は分厚く短いシャープな付け高台を設える。高台から直ちに張って斜め上方に直線的な体部をつくる。形態的には施釉陶器であるが施釉は認められない。須恵器壺底部(123)は高い外に踏ん張る高台を付ける。乳白色の色調を呈し、非常に軟質である。須恵器壺B底部はやや横に踏ん張る付け高台から直ちに体部を立ち上げている。灰釉陶器皿(126)は、ほぼ直立する低い付け高台より少し外にはって、斜め上方に直線的な体部をつくる。灰釉陶器皿(127)は、やや外に踏ん張る高い付け高台から直ちに内弯しながら斜め上方に体部を立ち上げている。



淡灰色粘質土 須恵器 116・120

暗灰色粘性砂質土 須恵器 117~119・121~125 灰釉陶器 126・127

第26図 遺物包含層出土土器実測図(3)上層包含層



128～130 SB01出土 131 SB02出土 133 Pt03出土  
 136 Pt60出土 138～140 茶褐色粘性砂質土  
 133～135 黒褐色粘性差質土 137・141・142 淡灰色粘性砂質土

第27図 製塩土器実測図

## (E) 製塩土器

製塩土器は、掘立柱建物SB01、SB02、Pit3、Pit60などの柱掘形および遺物包含層の各層で出土している。その量は14ℓコンテナ3個分である。

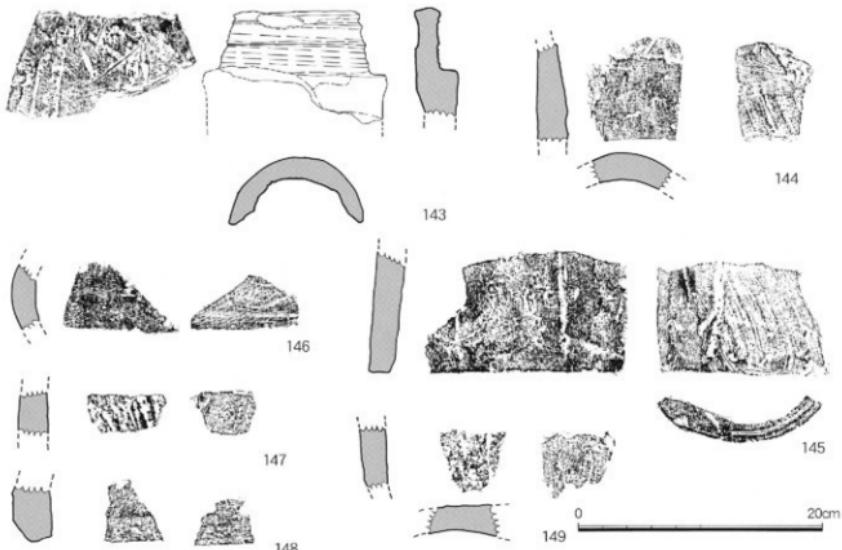
いずれも分厚く器体をつくり、粘土の積み上げ痕跡が明瞭である。胎土に長石粒を混和させ、一部ではクサリ礫を含んでいる。器体の色調は、二次焼成を受け赤茶けているが、基調は淡乳灰黄色を帶びるもの(128・129・130・132・136・137)と暗褐色のもの(138・141)、淡赤褐色のもの(133・134・135・139・142)があり、生産地の違いとも考えられる。

規格は大小あり、口縁部のつくりにも数種あるものの大別して2種の形態に分かれる。ひとつは内弯しながらほぼ直立した口縁部を設えるタイプ(129・139・141)と外反する口縁から括てて砲弾型の体部に尖底の底部を設えると考えられるタイプ(128・130・131・132・133・134・137・138・140・142)があり、このタイプの底部として(135・136)があると考えられる。

## (2) 瓦類

## (A) 瓦

瓦は、土坑SX01・掘立柱建物SB03柱掘形・河道2・溝内と遺物包含層から出土しており、破片総数26点出土している。軒瓦の出土はない。



SB03出土 143・145 SX01出土144 河道2(SD03)出土 146 SD201出土 147~149

第28図 遺構内出土瓦拓影・実測図

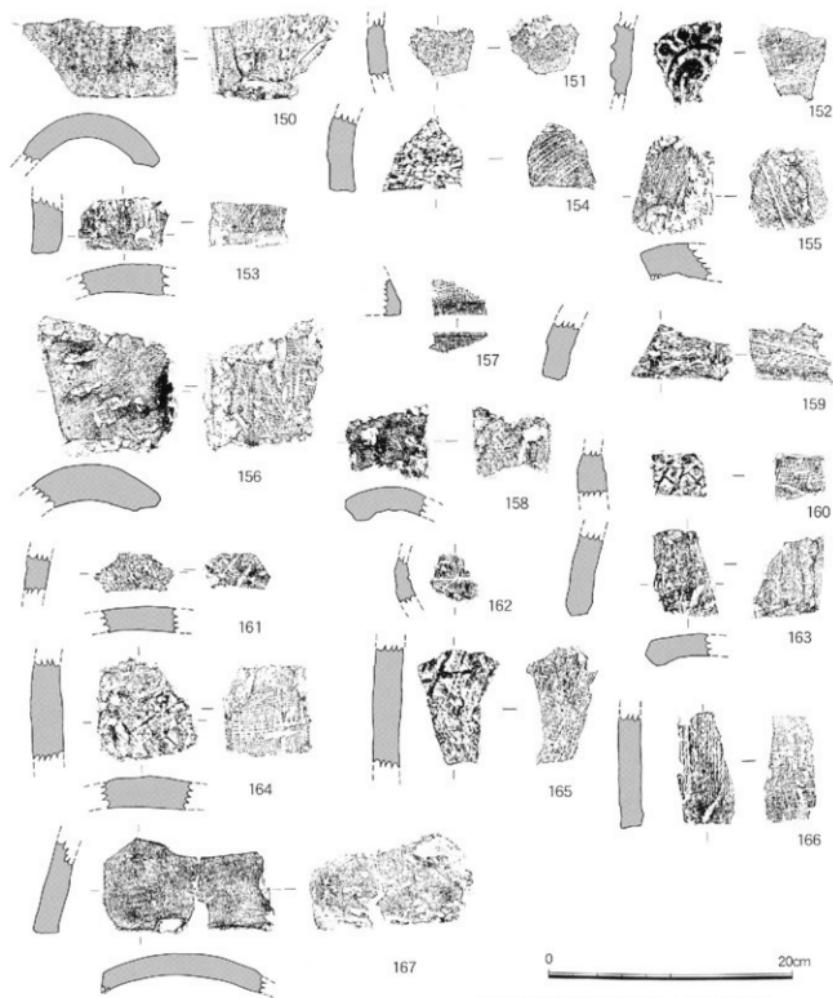
**遺構内出土の瓦(第28図143~149)**

(143)はSB03柱掘形から出土した玉縁式丸瓦の玉縁部分である。玉縁中央から下端よりに水切り突帯を2条巡らせる。この突帯を施す際に回転台による横ナデを行い、下端はヘラによる切り離しの際に粘土がめくれ上がるが、処置していない。破碎面が二次焼成を被り赤色に変色している。(144)はSX01から出土した丸瓦の背の部分である。外面はていねいなナデを行い、内面は粗く搔きあげた後、横方向にヘラ削りを行う。二次焼成の痕はない。(145)はSB03柱掘形から出土した面戸瓦もしくは熨斗瓦である。外面はナデ調整、内面は布目の上から縁部補強粘土を貼り、搔き取り後ヘラ削りで調整する。破碎面が二次焼成を被り赤色に変色している。(146)は河道3(SD03)から出土した内外面焼し焼の丸瓦片である。(147・148・149)はSD201から出土した平瓦片である。(147)は凸面で粗い縄目、凹面は布目を残す。(148)は熨斗瓦の側端部である。端部は2ヘラによる面取りをされ、凹凸面をヘラ削りによって調整する。(149)は凸面で格子叩きをしたあとナデル。凹面は布目痕を残し弱くナデル。破碎面が二次焼成を被り赤色に変色している。

**遺物包含層出土の瓦(第29図150~167)**

茶褐色粘性砂質土から出土した(150~154)のうち二次焼成をうけた瓦として(150・155)がある。(150)は面戸瓦の片側端部を欠くが、凸面はヘラ削り調整、凹面は布目痕の上からナデ調整をおこなう。(152)は軒丸瓦の瓦当の破片である。巴文であり上層部等からの混入の可能性もある。(151)は両面とも丁寧なヘラ削りで調整し、薄手のつくりである。(153)は須恵質熨斗瓦の小口端部片で

ほぼ直角に面とりし、全体にヘラ削りによる調整を行う。(154)は須恵質熨斗瓦の側面端部片で、凹面端をナデて「く」字に端部をつくる。凸面は繩状叩きのあとナデ、凹面は斜め方向のヘラ削りを行う。



第29図 遺物包含層内出土瓦拓影・実測図

黒灰色粘性砂質土から出土した(155～167)のうち(156～160)が二次焼成をうけた瓦である。(155)は熨斗瓦の側端部である。平瓦の側部に粘土を付加し内傾する端部をつくっている。(156)は面戸瓦片である。凸面はナデ調整、凹面はヘラ削りして「く」字に端部をつくる。(157)は端部でヘラ削りによってつくられている。(158)はやや薄手の丸瓦片である。端部をヘラによって3面につくる。凸面はナデ調整、凹面は端部を除いて布目痕を残す。(159)は平瓦の端部である。凸面格子叩きの後ナデで調整、凹面は布目痕の上から粗いヘラ削りを行う。(160)は平瓦片である。凸面は格子叩き、凹面は布目痕を残す。

二次的な焼成を受けていない(161～167)のうち(162・164)をのぞいてすべて須恵質もしくは焼した瓦である。(162)は丸瓦片で剥離面を残し、凹面に布目痕を残す。(164)は平瓦片で凸面は格子叩き、凹面は一部の布目痕をヘラで削り消す。須恵質の瓦(161)は平瓦片で凸面はヘラ削り、凹面は布目痕をナデ消している。(163)は熨斗瓦の隅端であるが、凸面は指オサエ、凹面は強くナデで調整し、端部を3ヘラで面取りする。(165)は平瓦片である。凸面は格子叩きのあとゆるくナデで調整する。凹面は強くナデで布目痕を消す。(166)は凸面に縄状叩き、凹面は、一部をナデ消すが布目痕を残す平瓦である。(167)は焼した瓦の平瓦片で、凸面はヘラ削り、凹面は丁寧にナデル。小口、側面端を残し、ほぼ直角にヘラで面取りする。

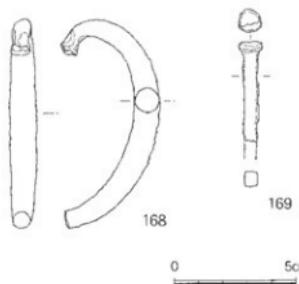
### (3) 金属製品・木製品とその他の遺物

#### (A) 金属製品

金属質遺物では鉄製品が2点出土している。

(168)は包含層上面より出土した断面円形の鉄製棒状品で、長さ13.7cmの丸棒を耳形に湾曲させたものである。太さは6.2～10.59mmを測る。X線透過観察では、中実であることがわかる。また若干、像のコントラストにムラが生じているが、鋳造時に生じるスは観察できない。端部については、一方は一旦細く絞ったものを端面付近で拡張しており、他の器物に接合したものと考えられる。もう一方の端部は直線的に裁断している。形状等からは、壺のような何らかの容器に取り付けた把手とも考えられるが、詳細については定かではない。

(169)は鉄製の角釘で包含層よりの出土である。先端を欠損しており、残存長4.1cmを測る。身部の太さは6.4mm×6.0mmのほぼ正方形を呈する。頭部は扁平に作り出され、平面形は直径9.6mmを測るやや歪な円形である。



第30図 金属製品実測図

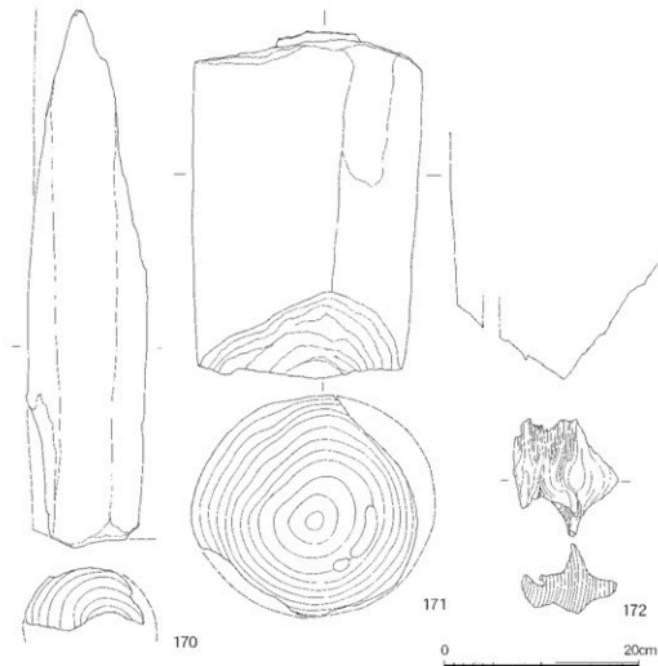
## (B) 木製品

木質遺物では建築材として柱材が3点出土している。

(170)はSB01柱掘形7建替え柱に設置されていた芯持ち丸太を使用した柱材で、直径のおよそ半分および地上部分が腐食により滅失している。残存する法量は高さ55.0cm以上、直径は12.0cmを測るが、現状ではこれらを復元することは難しい。なお、柱穴の掘形は最大径60cm、深さ50cmを測る。

(171)はSB04の柱穴4に設置されていた柱材である。芯持ち丸太を使用した柱材である。上端は表面が腐食し加工痕は不明瞭であるが、ほぼ平坦であり、何らかの方法で切断された可能性が高い。下端は両側面を斜めに切削し、楔形に加工している。現状での法量は高さ35.5cm、直径23.5cmを測る。

(172)もSB04の柱穴4より出土している。芯持ち丸太と思しき材であるが、腐食が激しく原形は定かでない。



第31図 柱材実測図

上記木質遺物の樹種について、ハンドセクション法を用いたサンプリングを行い、透過光での顕微鏡観察による同定を試みた。

結果、木質遺物(170～172)の3点はいずれもコウヤマキ(*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.)であることが判明した。以下に、同定根拠となった観察結果について記す。

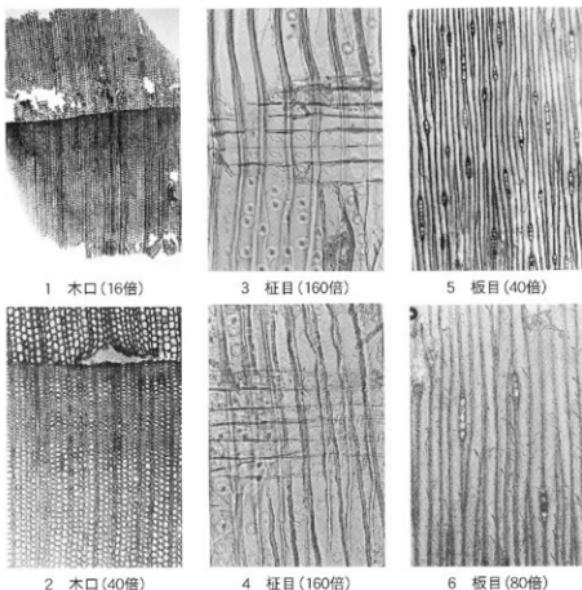


写真1 木材組織顕微鏡写真

**木口** 写真1-1は(171)の、1-2は(170)の木口断面(纖維断面)である。中央に年輪界が見える。早材から晩材への移行は緩やかである。道管と放射柔細胞のみで構成されており、垂直樹脂道は見られない。

**柾目** 写真1-3は(170)の、1-4は(172)の早材部柾目断面(放射断面)である。綫方向に仮道管が観察され、内部には綫列する有縁壁孔が存在する。写真中央部には水平方向に走る放射組織(写真1-3: 7細胞高、写真1-4: 6細胞高)が見え、仮導管との交差部分(分野)には窓状の分野壁孔が存在する。なお、放射組織に放射仮道管は存在しない。

**板目** 写真1-5は(171)の、1-6は(170)の板目断面(接線断面)である。綫走する仮道管と単列の放射組織断面が見える。仮道管放射壁には有縁壁孔が配列する。放射組織は最大11細胞高である。

コウヤマキは1属1種で構成されるコウヤマキ科に属する、日本固有の常緑高木である。福島県～九州地方に分布し、近畿では標高200～1650mの山林に、ヒノキ・モミなどと混生する温帶林構成樹種である。現代においては庭木や公園樹は本より、風呂桶や橋梁材などに使用例がある。用材として選択される理由としては、通直な材であるとともに年輪が均質で加工性が良いこと、水湿に耐えることなどが挙げられる。

コウヤマキは古くから有用な樹種として選択利用されてきた。特に弥生時代～古墳時代にかけて、木棺材として用いられたことは顯著な使用例として挙げられる。これは古文献にも現れており、「日本書紀 卷第一 神代上」に、「檜可以為瑞宮之材。楨(=横)可以為顯見蒼生奥津棄戸得臥之具。」(黒板勝美1974) とある。ここでは、楨(横)=コウヤマキを木棺材として用いること、檜=ヒノキ

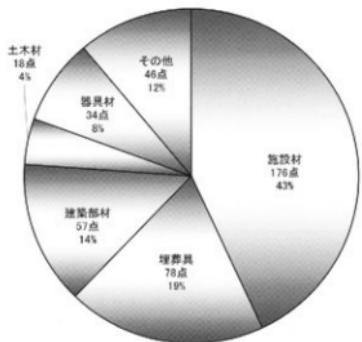
を宮殿の材として用いることなどが記載されている。実際、木棺材としての出土例が従前より指摘され、特に関西周辺では他の樹種に比して卓越する。

神戸市内の遺跡より出土した針葉樹材は2498点(2005年時点での公表資料による)が知られる。主な樹種は、ヒノキ属(1221点)・モミ属(536点)・ニヨウマツ(395点)・スギ(249点)・ツガ(138点)・カヤ(88点)となる。コウヤマキは409点にのぼり、針葉樹の中でも主要樹種であることが判る。また、第32図に見るように、コウヤマキ材を使用形態ごとに概観すると、井戸側材に代表される施設材、木棺材などの埋葬具、柱材などの建築部材、土木材である杭など、不動産を構成するものだけで329点、80%にのぼる。これ以外は容器や祭祀具、農耕土木具、食膳具、服飾具といった器具類であるが、比較的の少數である。

また「その他」としたものは板材や棒材、割材といった、用途確定の困難な加工木で占められる。これには不動産関連の材だけでなく、器具の部品等も含まれるであろう。

これを差し引いても、不動産関連資材は器具材に比して大型且つ複数で使用されることが多く、特に井戸側材や柱は多数の材を一括使用するために使用量は増加する傾向にある。この傾向が材の入手の難易や供給量、加工効率などを反映していることは明らかであり、コウヤマキの資源としての重要性を物語るものである。

また、藤原宮跡・平城宮跡・大宰府跡など、都城の柱材を概観すると、ヒノキに次いでコウヤマキが多く選択されている。これらが官衙建築全般に普遍的であると理解する事は短絡的に過ぎるが、地方官衙建物の可能性も想定される本例の性格を語る上で、今回の調査結果は示唆的であると言えよう。



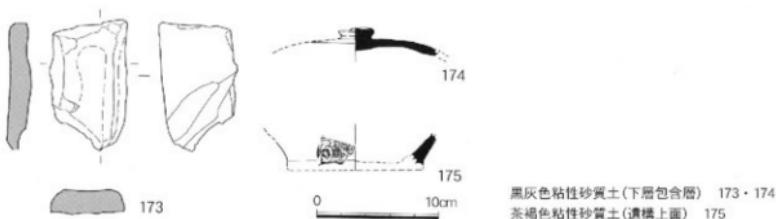
第32図 神戸市出土コウヤマキ材の使用形態

	分類	科 属 種	気乾比重	圧縮強度(kg/cm <sup>2</sup> )		
				曲げ強度(kg/cm <sup>2</sup> )	剪断強度(kg/cm <sup>2</sup> )	劈裂強度(kg/cm <sup>2</sup> )
針葉樹	イチイ科	カラマツ カヤ	0.48-0.61	360-610	500-800	77-100
	マツ科	マツ属 ニヨウマツ	0.57-0.59-0.62	390-420-390	600-675-1150	46-70
	コウヤマキ科	コウヤマキ属 コウヤマキ	0.64-0.69-0.72	310-340-450	420-520-730	65-75-91
広葉樹	スギ科	スギ属 スギ	0.33-0.38-0.44	220-250-450	530-470-800	36-63
	ヒノキ科	ヒノキ属 ヒノキ	0.36-0.42-0.53	220-350-440	420-610-810	65
	コナラ科	コナラ属 コナラ	0.71-0.79-0.86	320-460-430	570-650-1100	100
	クヌギ科	クヌギ属 クヌギ	0.73-0.85-0.98	310-560-640	570-640	-
	アカシガシ科	アカシガシ属 アカシガシ	0.66-0.88-1.15	400-600-800	420-510-1150	110-130-150
ツバキ科	スダジイ科	スダジイ属 スダジイ	0.53-0.58-0.64	210-450-530	650-1540-1200	80
	サルカバ科	サルカバ属 サルカバ	0.68-0.76	320	650	105
	モクレン科	モクレン属 モクレン	0.68-0.49-0.56	280-370-440	420-490-730	80-90-100

第2表 木材物性表

## (C) その他

(173)は加工岩石不明の砥石である。原料岩塊から剥離させた板材を蒲鉾形に加工し、一方の面を擦り面として使用する。使用面はやや船底状に窪む。裏面は原石剥離面のままである。(174)は須恵器蓋を転用した硯と考えられる。蓋内面に墨痕が一面に残る。(175)はヘラ線刻のある土器片である。板状高台から直線的に立ち上がる須恵器杯体部下端に施されていると推定される。一筆描きで花様もしくは人面様に描く。人面を描いたとすれば、向かって左に鬚を結った面長な女性を表現し、面の中央に目、鼻、目の順に一連に筆運して描き、その後をナデている。描かれた須恵器は胎土と色調から札馬古窯址で焼かれた製品と考えられる。



第33図 その他の遺物実測図

## 第IV章 まとめ

### 第1節 上池遺跡における建物群の変遷

今回の調査では、限定された調査範囲にも関わらず掘立柱建物12棟、土坑などを検出した。ここではこれらの構造・出土遺物の内容を検討し、調査範囲内の変遷を明らかにして上池遺跡における掘立柱建物群成立の意味を考える手立てとしたい。

#### 掘立柱建物群の検討

まず、掘立柱建物12棟を通観するとき、掘立柱建物の柱通りの方向、位置関係、柱掘形の形状に何通りかのグループが認められる。

群名	建物方向	柱掘形形状	柱掘形規模	掘立柱建物
第1群	真北	方形	大	SB01・SB06・SB09
第2群	真北	隅丸方形	大	SB02・SB04
第3群	北33° 西	方形	大	SB03・SB11・SB12
第4群	北28° 東	円形	小	SB07・SB08

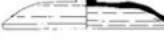
以上の4群に分けることができ、ほかSB05、SB10など方向を違えるものもある。

第1群にはSB01・SB06・SB09が該当する。調査区東部中央をほぼ4mから5mの間隔で雁行して建物列として検出されている。第2群は調査区南東部で検出したSB02とSB04のはば並列する建物群である。SB02の北側梁柱がSB06の梁柱を切り、SB02とSB04は柱を近接させているため、同一時には存在しなかったとみられる。第3群は調査区の北東部と南西部に分かれて検出されたSB03とSB11・SB12である。SB03は床面積30m<sup>2</sup>で上池遺跡における建物群のうちでも大規模な部類にはいり、重複状況からSB01を含む第1群とは同時に存在していなかったと考えられる。SB11・SB12は近接し、軒を接して同時に雁行して建てられていたと考えられる。建物方向北8° 東をとるSB05はSB02の桁柱に切られ、SB06に重複する。これらから第1群と第2群の建物存続期間の間際に建てられたと考えられる。北28° 東に建物方向を探るSB10は上池遺跡第1次調査SB01と同方位を探り、調査区南辺で検出したSD21・26・28が条單方向と同方位を探ることから、明石川中下流域の条單地割に規制された一時期の掘立柱建物と考えられる。第4群建物は、近接し、同一の柱通りを探っていることなどから、軒を接する同一時期の掘立柱建物群と考えられる。

#### 出土遺物の検討

各掘立柱建物毎に出土遺物の検討を行う。もとより掘立柱建物柱掘形内の出土遺物は少なく、周辺の溝・土坑でも遺物の量は少ない。さらに遺物の器種についても限定され、奈良時代～平安時代の土器編成の基軸となるべき土師器の多量出土がないことから、出土須恵器・土師器の個別の器形・調整の特徴をあげて、特に平城京・平安京出土遺物との比較検討をおこなった。〔古代土器1992〕

第1群掘立柱建物から出土した土器には須恵器皿B蓋(1)、皿B(2)、壺B I(18)があり、丸味を帶びた大井をつくる皿B蓋とやや踏ん張る、外へつまみ出す高台端部をもつ壺B Iは平城宮SK219に類似品をみることができる。第2群掘立柱建物から出土した土器には褐釉とみられる鉛釉陶器皿、緑釉陶器、口縁部を強くナデるc手法の土師器皿A(6・7)、壺A(9)が平安京左京二条二坊冷然院SD1・SD2に類似品がみられる。須恵器壺(8)は、加古川市札馬古窯址5号窯に類似品をみる。第3群掘立柱建物から出土した土器には、須恵器壺A(11)、皿A(12)と少し新しい様相の土師器壺Bが出土し、

年代	時期	遺構	出土遺物	土器編年	備考
	0期	SD21 SD26 (SD28)	 44  45	平城京左京 一条二坊五町 SD485	国分寺発掘 739
750	I期	SB01 SB06 SB09 SX01 第1群建物	 1  2  3  51  60	平城宮 SK219	大仏開眼 762
		SB05	 17	平常宮 SK2113	惠美押野の乱 764
800	II期	SB03 SB11 (SB12) 第3群建物	 11  12	長岡京遷都 長岡京跡～ 平安宮/兵衛府SD4	784 菜子の乱 810
		S810 S801 (第1次調査)	 22	平安京右从二条二坊五町 SD19	石畳街～駒石浜 渡船の制
850	III期	SB02 SB04 第2群建物	 4  8	平安京左京二条二坊 冷然院 SD1・SD2	845 魚住治修業の誤 862
		SX02 (第1次調査)	 9 第1次SX02	札馬II期	菅原道真 明石駿河 888
900	IV期	(SB07) SB08 第4群建物	 20  117	菅原道真左道 明石駿河 901	
		0内建物は 遺物の出土なし	 116  118  119	札馬III期	

第34図　上池遺跡における建物群の変遷

長岡宮期～平安宮左兵衛府SD4までの時期が考えられよう。第4群掘立柱建物群ではSB08柱掘形から高台付塊底部が出土しているが、SB07では出土遺物はみられない。しかし上層包含層で須恵器(117～120・123)のように板状の高台付塊が出土しており、SB08出土品と同時期の類似品をみられることから、下層包含層上面から掘り込まれた掘立柱建物群と考えられる。その時期は札馬5号窯前後まで降ると考えられる。建物方位を違えるSB05では須恵器蓋(16)、坏C(17)が出土し、とくに須恵器坏Cは上師器坏口縁部を摸する品で、平城宮SK2113に類例をみることができる。SB10出土の須恵器Ⅲは小破片であるが、須恵器の器形が施釉陶器に影響される時期であり、SB10が第1次調査SB01と同方位にあり、この第1次調査SB01が概ね平安京左京二条二坊冷然院SD1・SD2の土器に並行するSX02に切られることから、平安宮中務省SK201の時期を前後するとみられる。

土坑SX01で出土した土器は、今回の調査では一括性をもつ唯一の土器群である。上師器坏B(60)は外面ヘラミガキ、口縁部は上に拡張して凹線を内面につくる。盤A(67・68)はいずれも端部を平坦もしくは内傾面で仕上げている。また、やや外に踏ん張る高台から直ちに内弯する坏B(51・54・55)は特徴的である。いずれも平城京SK219に並行する土器群とみて大過ないであろう。したがって、SX01は第1群掘立柱建物に所属する土坑であり、第3群掘立柱建物SB12によって切られている。

溝(SD21・SD26)出土の須恵器坏B(44・45)は、平城京左京一条三坊十五坪SD485出土坏Bに類似し、溝の使用時期の下限を示している。

なお、遺構内の出土瓦はSX01および第3群掘立柱建物に限られる。特に第3群掘立柱建物掘形内の瓦は二次的な火焔を受けている。第3群掘立柱建物は火事の直後に整地(茶褐色粘性砂質土が整地層)して施工建築されたことは明らかであり、SX01から一次的な火焔を受けていない瓦が出土していることから、第1群掘立柱建物のうちに瓦葺き建物を含んでいたと推定される。

また、製塩土器の出土は、すべての建物から出土するが、第1群掘立柱建物柱掘形に目だって多くの出土をみている。製塩土器の多くは、所謂広瀬和雄の分類〔広瀬和雄1996〕による丸底Ⅲ式に相当する。生産地については、胎土分析等の実施をまつ必要があるが、形態からみて、淡路島もしくは備讃瀬戸の第VII期の所産と考えられよう。

以上、掘立柱建物の配置と出土遺物の検討から、今回の第3次調査における各遺構の変遷の復原を試みた。つまり、調査区南辺で検出した溝SD21・SD26施工時期の下限が平城京左京一条三坊十五町SD485の時期八世紀前半と推定されⅠ期とした。初期の掘立柱建物群の第1群とSB05が平城宮SK219から平城宮SK2113を下限とし八世紀後半前葉と考えられⅠ期とした。次に第3群と呼ばれる条里型地割に方位をそろえるSB10と第1次調査のSB01は、おおむね長岡京期から平安宮左兵衛府SD4の時期として八世紀末葉から九世紀前葉と推定されⅡ期とした。再び建物方位を真北にもどす第2群は平安京左京二条二坊冷然院SD01・SD2の時期九世紀中葉の時期が考えられⅢ期とした。そして小型の円形掘形の出土物第4群は平安京左京七条二坊一町SE64の時期であり概ね札馬古窯址群のⅡ期からⅢ期の過渡期として大過ないと考えられ、九世紀後半から十世紀前後とし、Ⅳ期とした。(註3)

以上を整理して第34図を作成した。八世紀半ばから十世紀にわたる掘立柱建物群の遷移があると想定された。今後の周辺地区的調査、そして近年進展をみせる奈良時代～平安時代中期の土器研究の進展によって多少の時期比定に前後が生じると考えられるが、調査時点における検出状況、建物方位、土器の検討に基づく成果として以降の検討を進めることにしたい。

## 第2節 上池遺跡をめぐる地形分析

明石川流域の地理的環境については第Ⅱ章第1節地理的環境において概略を説明した。ここでは現在の地形図上の残る形跡を検討して上池遺跡の歴史的性格を考える手立てとしたい。

現在、明石市域のうち明石川右岸においては北王子遺跡を最南端にJR線以南は、条里型地割の痕跡を残すものの、中世の城址である船上城跡〔稲原昭嘉2006〕まで現在のところ明確な遺跡分布が確認できない。今、明石川下流域の都市計画地図をもとに2m毎の等高線をひらい、さらに陸軍陸地測量部による明治年間作成の地形図を参考に等高線を復元して地形図を作成した。(第35図)明石川河口部から西側近現代の埋め立て部の北側明石市船上町旧村部を中心に半楕円状に2m等高線が周り砂堆部であることを示すが、その北側は幅100mから200mの帯状の低地帯となっている。低地帯の北側は条里型地割の痕跡を残し、4m等高線が北王子遺跡の南辺まで伸び、西側は段丘崖下まで展開している。また、明石川右岸では4m等高線では自然堤防の形成がJR線までは明確であるが、それ以南では微弱である。これらから推測できる地形は明石川右岸下流部では、奈良時代までは低湿地地域であり居住に適さない地域であった可能性が高い。

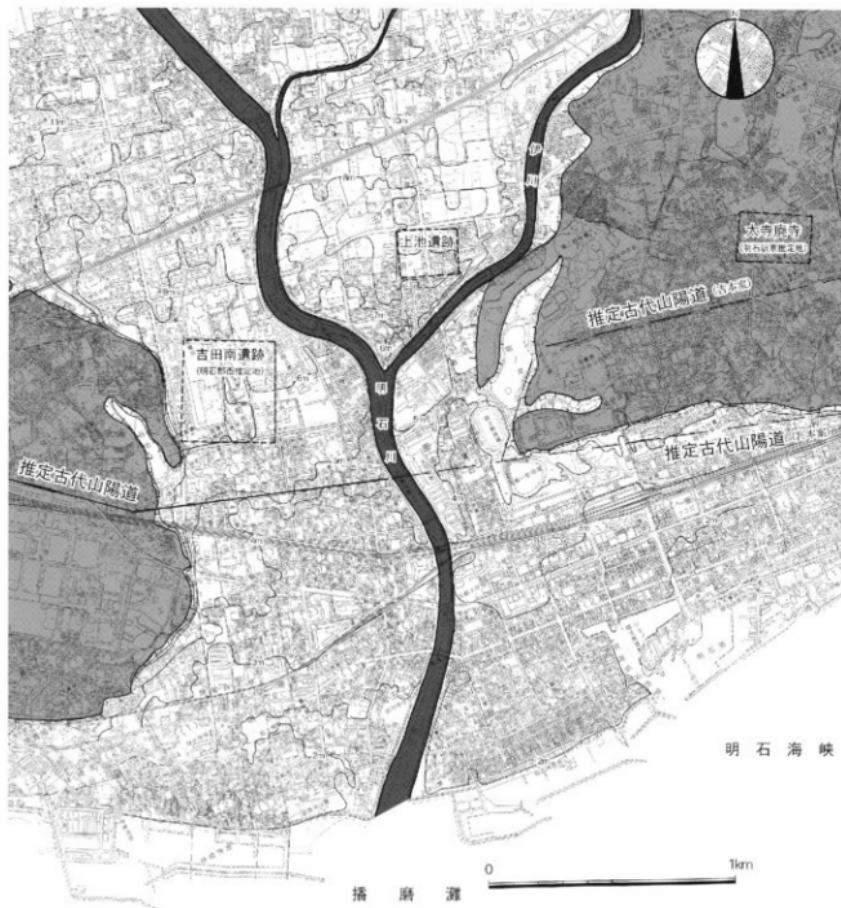
次に今回発掘調査を実施した上池遺跡周辺について都市計画図上で50cm等高線をひろい微地形分析を試み、さらにこれらの試掘調査地を微地形図に載せて検討をくわえた。(7頁第4図参照)①・②地点はこの伊川の氾濫痕跡上に位置し、砂・礫の分厚い堆積も伊川の氾濫によるものであり、それが比較的新しい堆積であることが肯ける。③・④地点での青灰色粘質土の堆積は上池地区のなかでこの地域が、帶水した沼沢地であったことを示すと考えられる。④地点北部の試掘坑での陸化した地層は、陸地の南西限を示し、明石川の流水による砂嘴が形成されていた可能性を示している。つまり、明石川との合流地点から北東側に湾入した舌状の窪地地形が緩やかに南西方向に傾斜して広がっていることがわかる。この窪地は東西80m、南北50m前後の広がりをみせ伊川沿いの南側では旧伊川の氾濫痕跡もしくは旧河道が帶状に貫いている。

以上のような明石川下流域における微地形の検討から知ることができる地形的状況は、第1に上池遺跡付近については、伊川と明石川の流水量が不均衡であった場合、蛇行しつつ南流する明石川は砂嘴をつくり、少なからず伊川の流水が逆流して、上記の微地形分析で抽出した舌状窪地地形の生成と水の流入を促し、小規模なラグーン(潟湖)を形成したものと考えられる。第2にとくに明石川河口付近は、狭い海峡に潮汐の影響で、大量の海水が一度に押し寄せるため海面が盛り上がり、その量は1mを超えるという。つまり明石川下流右岸部で標高4mの等高線が示す広く緩やかな平坦地として抽出した低地帯はラグーン(潟湖)として存在したとみられるのである。

このような地形形成をみた明石川下流域は、上池遺跡が存在した奈良時代後期から平安時代中期にはどのような歴史景観の中にはあったのであろうか。

八世紀後半、地球的規模で温暖化期に入ったといわれている。所謂「ダンケルク海進」である。諸説あるが平均気温が1℃上昇し、海水準が約1m～3m上昇したという説も唱えられている。これら歴史地理学の見解に従えば、おそらくも中世末期までは明石川下流域は標高2m等高線付近にまで海水が流入し、船上町の砂堆は砂嘴状の半島となり、北側は大きく入り江になっていたと考えられている。〔古本昌弘1985・千田 稔2002〕つまり明石川の河口も北上して上池遺跡から程なく河口があり、河口と上池地区の小潟湖も短い水路でつながり、常に帶水する状況であったと考えられるのである。このようにみれば、明石川下流の入り江を

「わが船は明石の湖(みなと)こぎ泊てむ沖へな放りさ夜ふけにけり」 (万葉集卷7 1229)  
と歌われた「明石の湖(みなと)」(大野 淳1954)あるいは『播磨風土記』賀古郡条(秋本吉郎1954)



第35図 上池遺跡周辺の地形と主要遺跡

にいう「赤石郡の林の湖(みなと)」の「湖」は明石川河口に広がる潟湖を表現したものであり、この潟湖の北の高台には、明石郡衙とされる吉田南遺跡の整然とした建物群が、明石川と伊川合流点の小潟湖北東部の砂堆上には上池遺跡の建物群が軒を連ねたと考えられるのである。

### 第3節 上池遺跡の歴史的意義

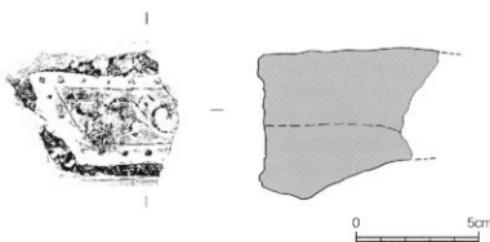
第一に、第1節で述べたように八世紀半ば以降継続的に掘立柱建物群が建てられ、除却された後の土坑や遺物包含層または後続する建物の掘形埋上に二次的な火炎を受けた瓦の出土を見るのみであるが、奈良時代～平安時代前半の建物群のなかには、瓦葺き建物の存在が推定された。そういう意味からも第一次調査で出土した軒平瓦(第36図)が注目される。この軒平瓦は播磨国内の駅家関連遺跡や国府・郡衙・国分寺・国分尼寺推定地での出土が確認されている播磨国府系瓦のうちの古大内式瓦の一つであり、各所での駅家比定の根拠となる瓦とされる。また、Ⅲ期とした掘立柱建物SB04の柱掘形からはコウヤマキの柱材が出土し、平城宮の主要建築材でヒノキと並ぶコウヤマキが用いられていることは、一部に瓦葺き建物が存在したことも含め、これら掘立柱建物群が官衙もしくは官衙に付属する公的な建物群であったことを示している。このような上池遺跡の実態をふまえると、古代山陽道に通常設えられたとされる「瓦葺粉壁」の駅館(日本後紀大同元年五月丁丑条)〔黒板勝美1977〕が設置されていたとみれば、その規模は、現在までの試掘調査などの結果から200m×200mの約二町四方のほぼ平坦な方形区画内に想定される。さらに第一次調査で検出された掘立柱建物の方位が50m西の今回調査地で検出されたSB10が同方位を採用する事実は、前節で精説したように建物群が相当に広範囲な広がりをみせることを裏付けていると考えられる。

第二に、Ⅰ期とⅢ期の建物群が真北方位に建物方向を採用している点である。この事実はすでに施工されていた条里方向を無視した建物群を形成している点から、これらの時期に奈良時代の国府・郡衙など官衙にみられる律令に基づく建物群であった可能性を示すと考えられる。特にⅢ期は『続日本後紀』承和十二年(845年)八月七日の条〔黒板勝美1974〕に「淡路国石屋浜と播磨国明石浜に始めて船ならびに渡し守を置き以て往還に備なう」という所謂「石屋浜・明石浜渡船の制」の公布の時期にあたり、この時期中央からの指導のもとに律令に基づく建物群に再整備されたとみることもできるよう。

第三に、第一次調査では蹄脚硯1点、今回の調査では円面硯1(50)、転用硯(174)1点が出土しており、奈良時代～平安時代前期の一般的な集落遺跡にはみられない品々であり、律令制下における地方官衙で使用された可能性が指摘できる。そして、遺跡出現当初から、平城京をはじめとして都城で用いられたと考えられる口用雑器である須恵器・土師器・陶器が比較的多量に出土し、特に第一次調査の成果も含め、九世紀前半の建物群には当時高級品とされた施釉陶器が多量に出土している。また、SX01出土鉢(61)が筑前窯の須恵器、時期は降るが下層包含層山上皿(98)が尾張窯の須恵器である可能性も考えられる。つまり出土量は少ないながら、東海から九州までの窯業生産地で生産された日常雑器が当地に搬入されている事実であり、平城京・平安京からの搬入も含めて、少なからず上池遺跡がこれらの物流の通過点として八世紀中頃から九世紀中頃まで建物群が機能していたことを示していると考えられる。

第四に建物群全時期にわたって製塩土器の出土が多く、その土器の形態からみて備前・備中・讚岐産の塩が運ばれ、上池遺跡に集積されていた可能性がうかがわれる。これらは、日本後紀延暦十七年(799年)の条〔黒板勝美1974〕にみられる備前国百姓の「調の塩」にあたるのかどうかは別にして、備前国・播磨国をはじめ瀬戸内諸国の民が製塩をおこない、塩を調庸として運搬し納めていた〔岸本雅敏1989〕ことを示し、その中畿地の一部が当地であった可能性も検討する必要がある。

第五にまたⅢ期以降東播磨窯とみられる須恵器が比較的多く出土していることが指摘できる。これらのこととは、この時期須恵器生産を行った窯は畿内周辺では少ないが、加古川市札馬古窯址群〔中村 浩1982〕が最盛期を迎える播磨国内の須恵器生産品〔岸本一郎1993〕が明石郡にまで運び



第36図 上池遺跡第1次調査出土瓦拓影・実測図

込まれ流通していたと考えられ、後代中世須恵器の搬出地とされる魚住津の再整備(註4)までの期間なんらかの役割を果たしたと考えられる。

以上5点から考えられる上池遺跡の実態は、明石郡明石郷の主邑としてあり、地の利の点からみて、明石川・榎谷川・伊川を用いた内陸水運の要であったと考えられる。また、上池遺跡の南800mには東西に貫通する古代山陽道は平城京・平安京と大宰府をむすぶ当時の一級幹線官道「大路」であり、明石川の対岸に明石郡衙を擁し、明石川河口を介して古代瀬戸内海航路に繋がれば、明石郡における中央との政治・経済上の結節点であったと考えられるのである。

## 註

1. 「和名抄」高山寺本では5郷に記し、東急本では神戸郷を加える。
2. 鎌倉時代「玉造保」は文献にみられ、伏見殿御料として伝頒される。おおむね玉津町東部から榎谷町の一部に比定される。一方明石津は古代～中世には長講堂領とされ後白河院領であったが、承久の乱後幕府の管理下に持明院統に伝頒された。
3. 各上器編年上の絶対年代は〔奥淳一郎1983〕〔古代土器1992〕〔百瀬正恒1994〕による紀年木簡・土器の検討を参考にした。
4. 魚住泊は、行基の抵津播磨の五泊の伝承を残し、『大日本地名辞書』(吉田東吾1970)が現在の明石市江井ヶ島に比定する。天長九年(832年)修築の太政官符が出され、貞觀九年(867年)僧賢和、賢義によって修築がなされる。これ以後も三善清行の「意見封事十二箇条」に海岸浸食による荒廃からの再建が請われている。なお「意見封事十二箇条」には魚住泊は天平年中に建立され、弘仁の代に荒廃したとされる。

## 引用・参考文献

- 秋本吉郎1954 『風土記』日本古典文学大系第2巻 岩波書店 1954年  
 深間俊夫1977 『新方遺跡発掘調査概要』 神戸市教育委員会 1977  
 深谷誠吾1996 『新方遺跡北方地点第3次調査』平成5年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1996年  
 池田毅他1994 『上池遺跡』昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1994年  
 池辺彌1966 『和名類聚抄郷名考証』 古川弘文館 1966年  
 石木秀啓2007 『牛頭窯跡群と九州の須恵器生産体制』 国立歴史民俗博物館研究報告第134集 2007年  
 稲原昭嘉1999 『太寺庵寺塔跡』平成9年度明石市埋蔵文化財年報 明石市教育委員会 1999年  
 稲原昭嘉2002 『北王子遺跡確認調査』平成12年度明石市埋蔵文化財年報 明石市教育委員会 2002年  
 稲原昭嘉2003 『太寺庵寺跡第4次』平成13年度明石市埋蔵文化財年報 明石市教育委員会 2003年  
 稲原昭嘉2003 『古代山陽道跡辻ヶ内地点』平成15年度明石市埋蔵文化財年報 明石市教育委員会 2005年  
 稲原昭嘉2008 『古代山陽道跡福里地点』平成13年度明石市埋蔵文化財年報 明石市教育委員会 2003年  
 稲原昭嘉1999 『船上城第4次』平成16年度明石市埋蔵文化財年報 明石市教育委員会 2006年

- 今里幾次1978 「播磨岡の瓦葺駅家」古代を考える17 1978年
- 岩本正二1996 「瀬戸内東部の土器製塙」1996古代の塙作りシンポジウム 蒲刈町 1996年
- 大野 晋1954 「萬葉集」第二卷日本古典文学大系第5巻 岩波書店 1954年
- 角川地名1988 「角川日本地名辞典」28兵庫県 角川書店 1988
- 岸本雅敏1989 「西と東の塙生産」古代史復元9 古代の都と村 1989年 講談社
- 岸本一郎1993 「東播磨」「須恵器の編年とその時代」季刊考古学第42号 雄山閣出版 1993年
- 口野博史2000 「玉津田中遺跡発掘調査報告書」 神戸市教育委員会 2000年
- 黒板勝美1974 「日本後紀」新訂増補国史大系 前篇 吉川弘文館 1974年
- 黒板勝美1975 「日本後紀」新訂増補国史大系 吉川弘文館 1974年
- 黒板勝美1974 「続日本後紀」新訂増補国史大系 吉川弘文館 1974年
- 黒板勝美1974 「続日本紀」新訂増補国史大系 前篇 吉川弘文館 1974年
- 黒川義隆1988 「明石市史史料」第4集(考古篇) 明石市 1988年
- 神戸市1988 「新修『神戸市史』自然・考古編 神戸市役所 1988年
- 神戸市教育委員会1979 「神戸市文献史料」第二卷 神戸市教育委員会 1979年
- 古代土器1992 「古代の土器1」都城の土器集成 古代の土器研究会 真陽社 1992年
- 斎木 敏2010 「山合遺跡第37・38次調査」平成19年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 2010年
- 斎藤孝正1983 「猿投塙編年の内検討について」愛知県陶磁資料館研究紀要2 愛知県陶磁資料館 1983
- 須藤 宏1996 「高津橋・岡道跡第1次調査」平成5年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1996年
- 閔野 豊1998 「新方遺跡西方地区第1次・第2次調査」平成7年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1998年
- 千川 稔2001 「埋もれた港」小字館ライブラリー139 小字館 2001年
- 高橋 学1990 「播磨灘沿岸平野の地形環境と土地開発」今里幾次先生古希記念播磨考古学論叢 1990年
- 高橋美久二1990 「古代播磨国の駅屋」今里幾次先生古希記念播磨考古学論叢 1990年
- 翼淳一郎1983 「平城京における平安時代の焼物」愛知県陶磁資料館研究紀要2 愛知県陶磁資料館 1983
- 丹治康明1983 「北別府遺跡 昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1983年
- 同志社大学1987 「明石市域の遺跡詳細分布調査(1)」明石市教育委員会 1987年
- 中村 浩1982 「札馬古窯跡発掘調査報告書」 加古川市教育委員会 1982
- 庄瀬和雄1996 「瀬戸内東部の土器製塙」1996古代の塙作りシンポジウム 蒲刈町 1996年
- 藤井太郎2003 「新方遺跡平松地点第3次調査」平成12年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 2003年
- 藤井太郎1998 「寒風遺跡第1次調査」平成7年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1998年
- 兵庫県1987 「兵庫県史」史料編中巻二 兵庫県 1987年
- 東吉代秀1999 「新方遺跡西方地区第3次」平成8年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1999年
- 前田保大1980 「六甲の森と大阪湾の誕生」(神戸の自然4) 神戸市立教育研究所 1980年
- 前田佳久1989 「上池遺跡」昭和61年度度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1989年
- 前田佳久1997 「二ッ原遺跡第1次」平成6年度度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1997年
- 宮本 博1994 「明石公園内出土遺物-特に「古代山陽道」に關連して-」歴史と神戸第33巻第4号 神戸歴史学会 1994年
- 百瀬正恒1994 「平安京の土器と陶磁器」季刊考古学第49号 雄山閣出版 1994
- 山口英正2003 「新方遺跡 野手・西方地区発掘調査報告書1」 神戸市教育委員会 2003年
- 山下俊郎1990 「明石市天文町1丁目出土の本町式軒平瓦」今里幾次先生古希記念播磨考古学論叢 1990年
- 山本雅和1999 「白水遺跡 第4次」 神戸市教育委員会 1999年
- 吉田東吾1970 「増補版『大日本地名辞書』中国・四国 富山房 1970年
- 吉田南調査団1976 「吉田南遺跡調査実績報告(第1・2次調査)」 吉田・片山遺跡発掘調査団
- 吉本昌弘1985a 「播磨國の山陽道古代駅場」歴史と神戸第24巻第1号 神戸歴史学会 1985年
- 吉本昌弘1985b 「播磨國明石駅家・浜津郡須磨駅家の古代駅路」歴史地理128 歴史地理学会 1985年
- 吉本昌弘1985c 「明石之潮に関する歴史地理的考察」歴史と神戸第24巻第2号 神戸歴史学会 1985年
- 渡辺伸行1987 「新方遺跡東方地点第1次・第2次調査」昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1987年

# 図版



1. 上池遺跡周辺航空写真(南から) 昭和57年撮影



2. 調査区東部全景(北から)

図版2



1. 調査区東部全景(南から)



2. 調査区西部全景(南から)



1. 掘立柱建物SB01(西から)



2. 掘立柱建物SB02(北から)

図版4



1. 掘立柱建物SB03(西から)



2. 掘立柱建物SB04(北から)



1. 掘立柱建物SB05(北から)



2. 掘立柱建物SB06(北から)

## 図版6



1. 掘立柱建物SB07(南から)



2. 掘立柱建物SB08(南から)



1. 堀立柱建物SB09(東から)

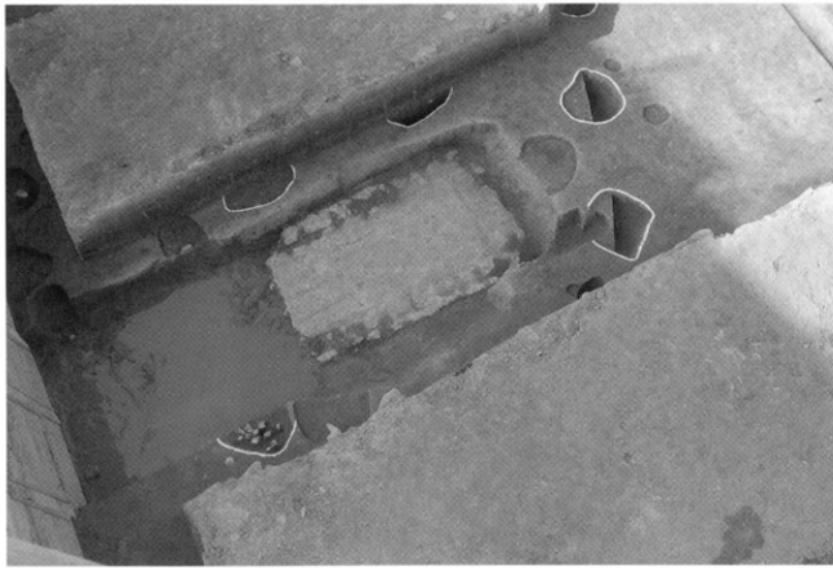


2. 堀立柱建物SB10(南から)

図版8



1. 堀立柱建物SB11(西から)



2. 堀立柱建物SB12(東から)



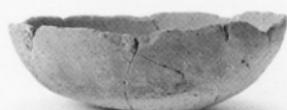
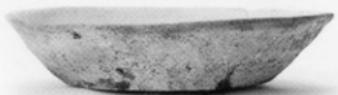
1. 堀立柱建物SB04 柱材検出状況(西から)



2. 不明土坑SX01(北西から)

図版10

出土遺物 土器(1)



図版11

出土遺物 土器(2)



54



51



98



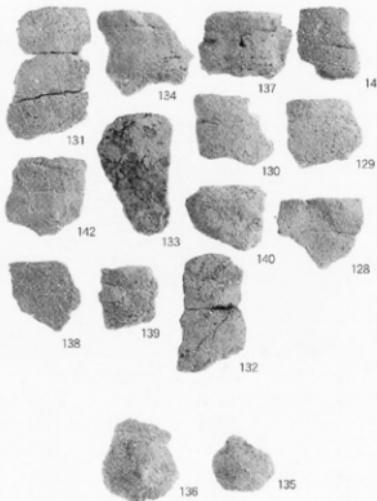
60



68



64



171

製 塩 土 器

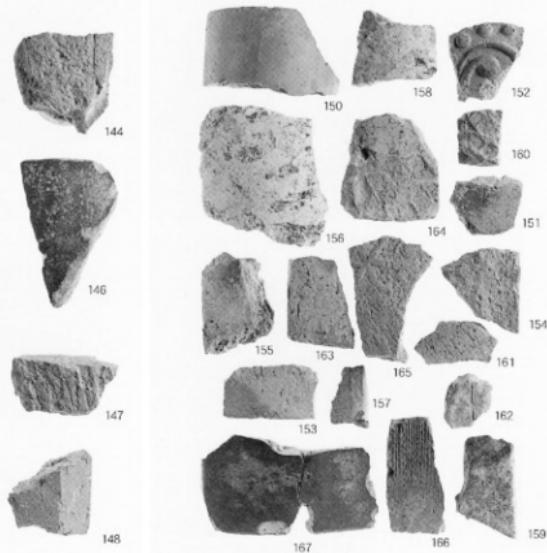
線 刻 土 器 片

## 図版12

出土遺物 瓦・その他



1. 遺構内出土瓦



2. 遺物包含層内出土瓦



3. 砧 石



4. 転 用 瓦

173

出土遺物 木材・金属製品



1. 金 属 製 品



2. 金 属 製 品 レントゲン写真



3. 柱 材

## 報告書抄録

ふりがな	かみいけいせき だいさんじ はっくつちょうさはうこくしょ							
書名	上池遺跡 第3次 発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	西岡巧次(編) 中村大介							
編著機関	神戸市教育委員会							
所在地	〒650 8570 兵庫県神戸市中央区加納町6丁目5番1号							
発行年月日	平成22年12月28日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡	所在地	市町村 遺跡番号						
上池遺跡	兵庫県神戸市 西区玉津町 上池字五鬼田 315-6, 315-7, 315-10	28110	西区 132	36° 39' 36"	134° 59' 26"	平成21年8月5H 平成21年11月1日	315m <sup>2</sup>	老人福祉 施設建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な構造	主な遺物	特記事項			
上池遺跡	官衙	奈良時代～ 平安時代前期	掘立柱建物12棟 溝・河道29ヶ所 性格不明土坑1ヶ所	須恵器・土師器 綠釉陶器・灰釉陶器 製塙土器・瓦・柱材 砥石				
要約	明石川と伊川の合流部に位置しおむね4時期の建物群が検出された。奈良時代後期のI期と平安時代前期のIII期における建物群は方位を真北に採り、瓦・綠釉陶器など都城に見られる遺物が出土し、官衙的な建物であると考えられた。調査地の立地と旧地形を検討した結果、当地は、古代明石郡明石郷の主邑としてあり、明石川・櫛谷川・伊川の内陸水運の要であったと考えられる。また、調査地の南800mには東西に貫通する古代山陽道は平城京・平安京と大宰府をむすぶ当時の「大路」であり、明石川の対岸に明石郡衙を擁し、明石川河口を介して古代瀬戸内海航路に繋がれば、明石郡における中央との政治・経済上の結節点であった可能性は高い。							

## 上池遺跡 第3次 発掘調査報告書

平成22年12月28日発行

発行 神戸市教育委員会  
〒650-8570 神戸市中央区6丁目5番1号  
TEL 078-322-6480

印刷 有限会社 岡印刷出版  
〒652-0804 神戸市兵庫区塚本通3丁目1番25号  
TEL 078-577-2243

